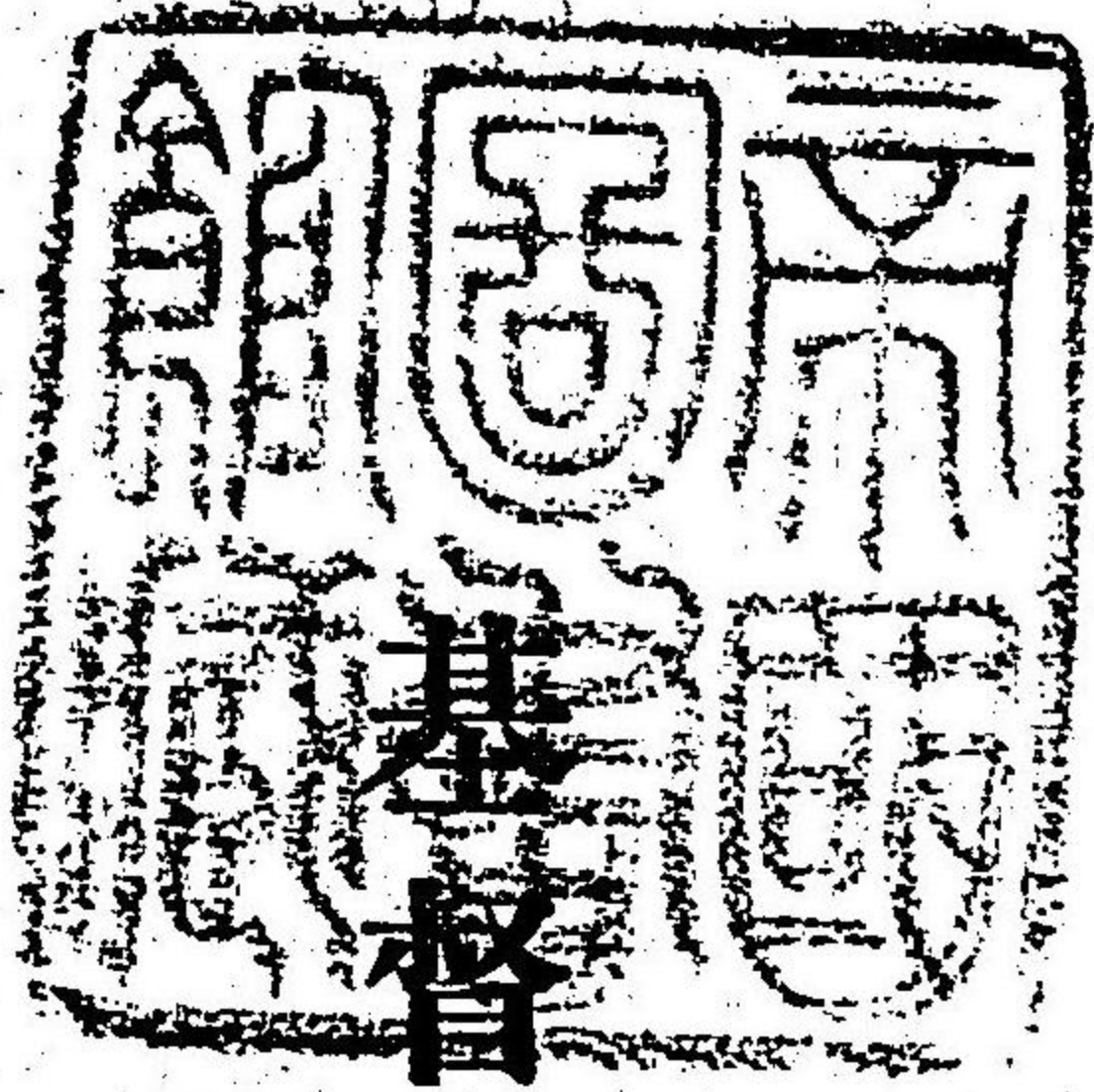


21166



の超人格



# 基督の超人格目次

## 序論

### 第一篇

#### 第一章

耶穌基督は人間以上の者なるを證す……………七  
耶穌基督の教訓の崇高なる事を以て其超人性  
を證す……………七

#### 第二章

耶穌基督の宣教及び奇跡が群衆の上に生じた  
る結果に由りて其超人性を證す……………三

#### 第三章

耶穌基督の普遍なる人格に由りて其超人性を  
證す……………三

#### 第四章

耶穌基督の献身無慾に由りて其超人性を證す…五  
耶穌基督の完全なる聖徳に由りて其超人性を  
證す……………五

#### 第五章

證す……………五

基督の超人格目次

第貳篇 耶穌基督の神なるを證す……………六

第壹章 耶穌基督は自ら神なることを明言したるが故に神なるを證す……………六

第二章 耶穌基督は愛を求めて之を得たるが故に神なるを證す……………九

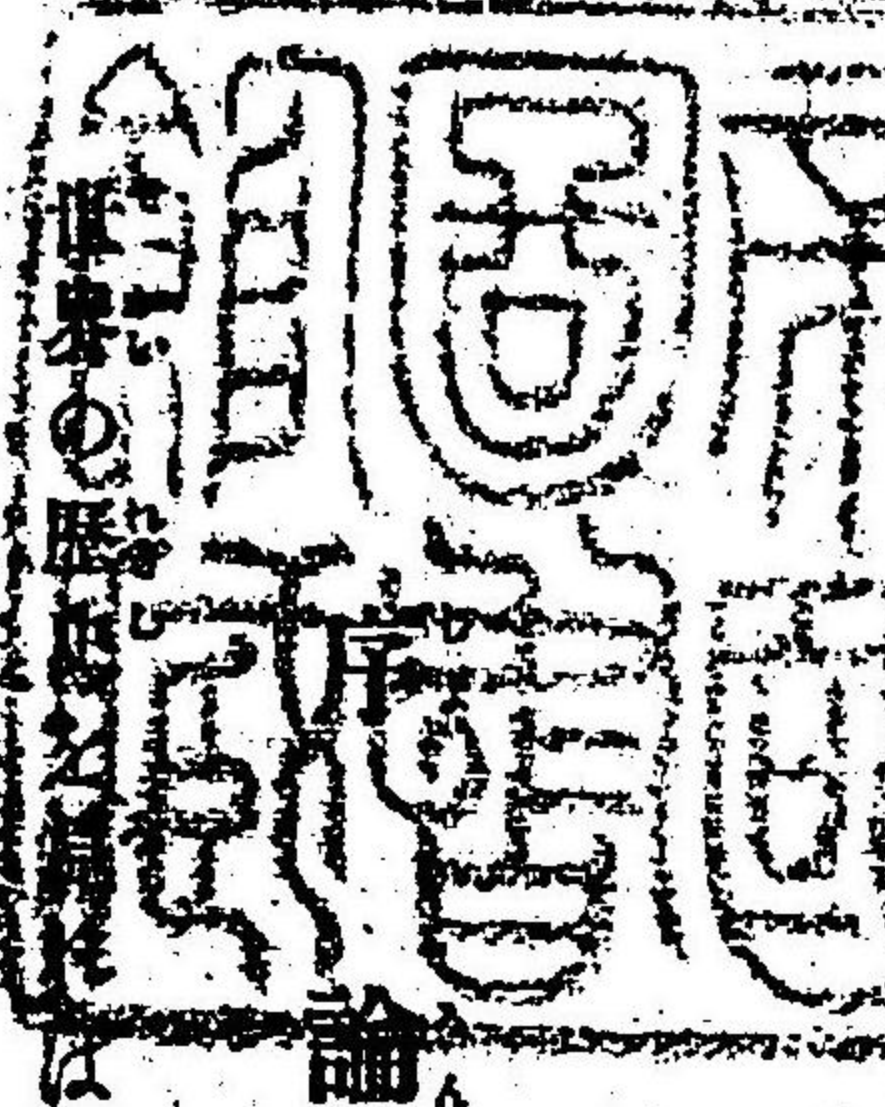
第三章 耶穌基督は自ら憎まるべきを豫言し、果して其言の如く憎まれたるが故に神なるを證す……………二四

第四章 耶穌基督は世を刷新したるが故に神なるを證す……………二四

第五章 耶穌基督の建てたる教會は永久不變なるを以て其の神たるを證す……………三五

基督の超人格

佛國 ルマレシヤル 著



世界の歴史に於ては後世の人より偉人豪傑と呼ばるゝ者が澤山ある。其中にて最も名高い者を擧ぐればソクラテス、プラトン、孔子、釋迦、アレキサンデル、セザル、ナポレオン等である。是等の人は果して偉人豪傑の名に背かないか、又は如何なる點まで偉人豪傑であつたかは茲に論じまい。唯一つ確實なることは世人が彼等を偉人豪傑と呼んでも決して

基督の超人格

て彼等が絶對的に如何なる點より觀ても偉人豪傑であるといふ意味では無いことである。彼等の中には一方に於て偉大なる才能或は歎賞すべき性行を有すると同時に他の一方に於て著しく其の偉徳を毀損する道徳上の缺點と弱點とを有する者が少くない。

余の不思議で堪えらぬことは、日本國の學者と云はるゝ者が如上の偉人豪傑中に耶蘇基督を數へて之を彼等に比較するのみならず猶ほ少くとも或點に於て基督は彼等の中の或者に劣れりと爲すことである。例へば彼の文學博士井上哲次郎氏が嘗て漢學者の集會せる席上にて爲せる演説の中に孔子の人格は釋迦と基督との夫に優れりと斷言したるが如き最も噴飯すべき此一例である。

苟も公平無私の心を以て眞面目に孔子と基督との生活事業及び教訓を研究する者は必ず此兩者の間に天地雲泥の懸隔あるを發見するであらうけれども井上博士の如き考を懐いて居る者は幾度福音書を繰返して讀んでも耶蘇時代の猶太の學士等と同じく基督の性格を了解することは出來まい。基督の性質を少しでも會得した者の眼より見れば基督を孔子や其他の偉人豪傑に比較するのは恰も蠟燭の光を太陽の光に比べ、瓦片を金剛石に較ぶるやうで如何にも可笑く思はれるのである。

世の墮落したる者の中には彼等の腐敗せる心情に對し、基督の性格は餘り高尚に過ぎ、其の教訓は餘り完全に過ぐる所より、基督の教訓は

人間の守り得ぬものである。従つて基督が教へたることを悉く信じ守らせやうとするのは人を馬鹿にするものであるといふことを自分も信じ他人にも信じさせやうと努むるものがある。

斯様な人は度し難きものである。何となれば彼等は凡そ悪を作す輩は光を惡み己が行爲の責められざらん爲に光に就かず「約翰福音三の二十」といふ耶穌基督の聖言の如く光を見るを欲まぬからである。

然れども世には全く知らぬ者がある。是等の人には眞理を知らせねばならぬ。知れば信ずるかも知れぬ。故に余は福音書に據りて耶穌基督を知らしめ如何に多く彼が是迄世に現れたる又將來世に現るべき有りとあらゆる偉人豪傑に優つて居るかを示す積りである。寔に耶穌基督

基督は左の諸點に於て絶類無比である。

- 第一、其の教訓の崇高なること
- 第二、其の宣教及び奇跡が群衆の上に偉大なる結果を生じたること
- 第三、其の人格の普遍なること
- 第四、其の無私無慾にして献身的なること
- 第五、其の生活の完全清淨なること

以上の諸點を綜合して考ふれば耶穌基督は單純の人間ではなくて人間以上の者であるといふことが了解する而して彼が人間以上の者即ち神であることは次の證據に由りて愈よ明白に之を知ることが出来る。

- 第一、耶穌基督は自ら己を神なり神の子なりと言へること
  - 第二、耶穌基督は神として要求せる尊敬即ち禮拜と愛とを世人より得たること
  - 第三、耶穌基督は彼自身と彼の弟子との爲に先見し、預言したる如く古來世人に憎み嫌はるゝこと
  - 第四、耶穌基督は其の降生と教訓とを以て世界を更新したること
  - 第五、耶穌基督の建てたる聖會は萬代不變に永續すること
- 以下章を分ちて以上の諸點を證明し、正直眞摯に眞理を求むる者の參考に資したいと思ふ。

### 第壹篇

耶穌基督は人間以上の者なるを證す

#### 第一章

耶穌基督の教訓の崇高なる事を以て其の超人性を証す

耶穌基督と其の教訓とを知らんと欲する者は福音書を知らねばならぬ。福音書を善く知らないで耶穌基督や基督教の話を書けば飛んだ大きな誤謬に陥ることがある。福音書に書いてある事は吾人に左まで大切ならざる一と通りの歴史ではなく、萬一其の解釋を誤まれば人類の運命に最も重大なる影響を及ぼすべき事實である、大事件である。福音

福音は極めて簡單なる四卷の記録で、極昔時の人は之を使徒の記録と云つた。此書の大切である證據は此書が世に著れてから今日に至るまで各方面より之を研究する者が断えぬことである。彼等は此書の眞物であること、歴史上確實なること、其記事の正確なること等を證明することを努めた。又之に反して基督教の敵は断えず此書を攻撃し、百方其の價値を減殺して本書に對する吾人の信用と尊敬とを動かさうと努めて居る。格別前世紀には斯様なる唯理主義の批評家の攻撃が激烈しくあつたけれども、彼等は聖書を益々深く研究するに従つて福音書の確實眞正なる事に對する古來の信仰より離れ遠かれるものは其の道を誤れることを發見した。斯種の高等批評家が往々成功したのは單に

彼此相互に予盾衝突する臆説を列擧することに過ぎなかつた。批評學者ホスチンクスは千八百五十年以來聖書の出所に關して無慮七百四十七個の臆説を計上したが、其中六百個は絶對的に排斥せられ、残るところの大部分も同様の運命に遭遇しかゝつて居る。高等批評家は今より二三千年前に著されたる聖書の眞偽を判断するに其文體の異同や或は其時代に起れる某々事件に關する記述の有無を以てして、某書は某の著作に非ずとか、某の時代の物に非ずとか断定するのである。又彼等は神は其の造物との關係に於て異常特別の方法を以て干渉することを先天的に否認するが故に聖書中に記載せらるゝ一切の超自然的事實を否認するのである。然るに近時其の反動として之よりも一層温

和に一層賢明なる一派の批評家が起つた此温和派の批評學者は二三千年前も昔に出来た聖書の眞偽を今日に於て獨斷的に決定するのは誤謬に陥り易い仕方であるから是非とも其時代に近く生存せる人の證言を參考に供せねばならぬ例へば福音書に就て言へば救世主の生活と教訓とを親く見聞したる者の直弟子とか若くは使徒等の直弟子の弟子とか云ふやうな人の記録を參考するのである。斯様にして現代知名の唯理主義批評學者ハルナック博士を始として其他數名の批評學者は第一世紀の終末より第二世紀の起頭にかけて現れたる基督敎著作者の遺書例へば「デダケ」即ち「十二使徒の教訓」「パピアス」「アンテオケアのイグナシヨの著書」「ヘルマスの「バストール」」「ジュスチニウス」及び其他の人

人の著書中に引用せられたる福音書の章句を見て先天的高等批評家の誤謬を悟り福音書の確實眞正なることに關する傳來の信仰の正確なることを承認するに至つたのである。斯の如くして近代學者の間に提起せられたる福音書に關する大議論は結局其の眞正なる事及び歴史上確實なることを確認するに至つたのである。

夫故今日に於て耶蘇基督と基督敎との評論を試みると欲する者は誰でも福音書を其の憑據とせねばならぬ。借此福音書に據りて耶蘇基督の教を研究するならば其敎の崇絶高絶にして他に其類例を見ることが出来ぬといふことを容易く認め得るのである。

先づ第一に馬竇著福音書第五、六、七章に記載せられ普通に山上の垂



訓として世に知らるゝものを見よ。是は耶穌基督が一度に説きたるものであるか。或は使徒聖馬寶がカリレアに於る耶穌基督の教訓の大要を一所に蒐めたのであるか。は明かに知ることが出来ぬけれども、兎に角此山上の垂訓は天來の美と温和にして平安なる調子とに加ふるに一種優すべからざる權威を以てせるものである。故に此教訓を垂れたる者は此教を書冊の中より取つたでもなければ其先輩より借りたでもなく、無上なる立法者として自分より之を出したといふことが明白である。

「爰に耶穌群衆を見て山に登りたまひけるが、其の坐するや弟子たち來り就きぬ。耶穌乃ち口を啓き、彼等を訓へて曰く

心の貧乏者は福なる哉。天國は彼等の有なれば也。  
 柔和なる者は福なる哉。彼等は地を獲べければ也。  
 哀む者は福なる哉。彼等は慰藉らるべければ也。  
 義を飢渴きて慕ふ者は福なる哉。彼等は飽くことを得べければ也。  
 哀憐む者は福なる哉。彼等も哀憐を獲べければ也。  
 心の清き者は福なる哉。彼等は神を見るべければ也。  
 講和者は福なる哉。彼等は神の子と稱へらるべければ也。  
 義のために迫害を蒙る者は福なる哉。天國は彼等の有なれば也。  
 我が爲に人々なんぢらを詬諆り、汝等を迫害、汝等を誣て各種の惡き事を言はん時には、汝等福なる哉。喜べ樂め、天において汝等の報

賞大なれば也。

是れ即ち山上の垂訓の始である言は、新約の綱領である。爾時に至るまで世人は未だ曾て斯様な教訓を聞いたことが無かつたのである。人もし是等の教訓を垂れたる時に於ける世の有様と強者の壓制の犠牲たる弱者や貧者なる是等群衆の境遇とに想到し、我利我慾を以て充満せらるゝ憫むべき人心の永久なる状態を觀想するならば如何に是等の教訓が深遠賢明適切であるかを感賞せざるを得ぬであらう。けれども人間の心は幾多の邪慾に囚はれ、世間の思想は是等の格言と相絶すること天地雲泥も雷ならざるが故に、此綱領は到底之を實行し難く思はれる。世人が蛇蝎の如く忌み嫌ふもの即ち貧窮謙遜悲泣義の爲

に苦痛を甘受する事を愛好するを求むるは宛も世を更新にする爲め新なる人種が腐敗せる世の中に發出するを要求するやうなものである。故に耶穌基督は其の弟子將來の基督信者未來の使徒等に向つて次の如く言はれた

「汝等は地の鹽なり、鹽もし其味を失なば、何を以てか之を鹽せんや、……汝等は世の光なり……燈火を燃すや之を斗の下に置かず必ず家に在る凡ての者を照さん爲に之を燈臺の上に置かん。斯の如く汝等の光をして人々の前に耀かしめよ。然らば人々なんぢらの善き行爲を見て天に在す汝等の父を榮えせん。」  
去れば耶穌基督が世を更新する爲め期待にする者は其の弟子であ

る。彼は此大事業を其の弟子等に托したのである。而して彼は之が爲め  
 彼等より深遠該博なる學識も、偉大なる才能も、富貴も、天才も、要求せぬ。  
 唯彼等は彼に倣つて正義潔白及び其他の諸徳を實踐躬行せねばなら  
 ぬ。律法を全く純潔に守らねばならぬ。律法を純潔に守るとは猶太の學  
 士輩が曲解する如くでなく、神が定められた通りに之を守ることであ  
 る。而して耶穌基督が立法者の權を有することを明かに指示したのは  
 特別に此處に在るのである。

「我律法若くは預言者を廢せんとして來れりと思ふ勿れ、我は廢せん  
 てに非ず成就させんとて來れるなり。されば我誠に汝等に告ぐ、天地  
 の廢るまでは、律法の一點一畫も廢らずして、皆ことごとく成就する

に至るべし。

是故に人もし夫の至微き誠命の一を破り、又然か人に教へなば天  
 國にて至微き者と稱へられん、然れども之を行ひ且教ふる者は天國  
 にて大なる者と稱へられん。

されば我汝等に告ぐ、汝等の義もし學士とファリゼオ徒の義に勝  
 らずば、汝等天國に入るを得じ。

古の人に語つて曰れたるを汝等聞けり、殺す勿れ、殺す者は審判を  
 免かれずと。

我なんぢらに告ぐ、凡そ其の兄弟を怒る者は審判を免かれず、其の  
 兄弟に惡物よと曰ふ者は議會を免かれず、狂妄者よと曰ふ者は火の

ゲヘンナを免れず。

是の故に汝その禮物を祭壇に献ぐるに方りて若なんぢの兄弟に怨まるゝ所あるを其處に憶ひ出さば其の禮物を其處に祭壇の前に舍き先往きて汝の兄弟と和げ然る後來りて汝の禮物を献ぐべし。

古の人に語て曰れたるを汝等聞けり姦淫する勿れと、

されど我汝等に告ぐ凡そ慾念を懷きて婦を視る者は心の中にて既に之と姦淫したるなり。

汝の右の目もし汝を踏かさば抉りて之を棄てよ五體の一の喪ぶるは全身をゲヘンナに投げいれらるゝより勝ればなり。

汝の右の手もし汝を踏かさば切りて之を棄てよ五體の一の喪ぶ

るは全身のゲヘンナに陥るより勝れば也。

又言へるあり凡そ其妻を出さんとする者は離婚書を之に與ふべしと。

されど我なんぢらに告ぐ凡そ邪淫の爲なる外に其妻を出す者は之に姦淫をなさしむる也又出されたる女を娶る者も姦淫をなす也何と是等の教訓は孰も皆な眞直純潔崇高ではないか明快で正確ではないかけれども更に眼を轉じて其の隣人に對する愛徳の教訓が如何に完全圓滿の域に達するかを見よ

「又語て曰れたるを汝等聞けり汝の近倫者を愛し汝の仇を憎むべしと、されど我なんぢらに告ぐ汝等の仇を愛し汝等を憎む者を善し汝等

を迫害かつ譏誚る者のために祈禱れ。

然らば汝等天に在す汝等の父の子となるを得ん彼は善人と悪人の上に齊く其の目を昇し義者と不義者の上に齊く雨降したまふ也汝等もし惟己を愛する者を愛せば何の報賞かあらん收税官も然するに非ずや。

己の兄弟にのみ挨拶せば何の超えたる所かあらん異邦人も然するに非ずや故に汝等の天父の完全がごとく汝等も完全かれ一寔に感歎すべき教訓ではないか、ア、若も世の人々が此教訓を忠實に實行するならばどんなに多くの怨恨や陰謀や争論や訴訟などを無くするであらう此の愛き世も忽にして平和愛歡喜の世となるであら

うけれども斯く此世を正義柔和平安貞潔の世となし萬人を敵までも残さず愛する境涯に到達せやうと欲せば單に此教訓の至美至高なるを確認するばかりでは足らぬ單に自然の性向に従つて人を愛すばかりでは足らぬ人の爲に是等の諸徳を行ふばかりでは足らぬ特に世人の榮譽を獲得する目的にて行動してはならぬ耶穌基督は深く斯様な目的を非難せられたれば吾人は神の爲に天父を愛する心を以て行動せねばならぬ是に就て基督の宣へる言を聴け

一人に見られんとて汝等の義を之が前に爲すを慎め然らずば天に在す汝等の父の前に報を獲じ。

是故に施濟をなす時偽善者が人に尊ばれんとて會堂や街衢に爲

す如く己の前に喇叭を吹く勿れ我まことに汝等に告ぐ彼等は其報を獲たり。

汝は施濟をなす時なんぢの右の手の爲す所を左の手に知らしむる勿れ是なんぢの施濟をして幽隠が裏に成らしめん爲なり然らば幽隠に鑑る神は汝に報いたまふべし。

汝等祈るとき偽善者の若くなる勿れ彼等は人に見られんとて會堂に街衢の隅に立ちて祈ることを好む我まことに汝等に告ぐ彼等は其の報を獲たり。……汝等祈るとき異邦人のごとく言を多くする勿れ彼等は言の多を以て聽れんと思へばなり。

故に彼等に似る勿れ汝等の父は汝等の願はぬ先に汝等の需むる

物を知りたまへば也。

是故に汝等かく祈禱るべし天に在す我等の父よ願くは御名の尊崇ばれんことを御國の來格んことを御旨の天に成るごとく地にも成らんことを我等の日用の糧を今日我等に與へたまへ我等が人に赦すが如く我等の罪を赦したまへ我等を誘試に引きたまはざれ我等を惡より救ひたまへ亞孟。

如何なる人聖賢哲學者でも斯様な美麗で單純で深玄で完全で而も又簡潔なる祈禱文を作ることが出来ない此主禱文は實に萬人の祈禱である兒童は母の膝にて嬉々然として此祈禱文を誦へて天の父に其の願望を陳べ學者は之を誦へて其の深玄奥妙なる意義を究め盡すこ

とが出来ぬ。敬虔なる信徒は之を誦へて幸福を覚え、慈情のため憂慮のため悲哀のため心の亂れたる者も之を誦ふれば平安と慰藉とを感ずる。以て此祈禱文を教へたる者が如何に善く人間と人間の心情の要求とに通じて居つたかを知ることが出来る。彼は人をして神を其父と呼ばしめ、子女が父の手中に其身を投ずる如く人をして神の御手の中に其身を委せしめた。寔に神は我等の父である。更に基督の言ふを聴け。『汝等何を食はんかと生命のために慮かり、何を衣んかと身體のために慮かる勿れ、生命は糧よりも優り、身體は衣よりも優るならずや。天空の鳥を観よ、稼くこと無く、穡ること無く、倉に收むることも無けれど、汝等の天父は此等の者を養ひたまふ也。汝等は此等の者より

も大に優らざらんや。

汝等の中誰か能く慮かりて其長に一尺だも加ふるを得んや。

汝等なんぞ衣服のために慮かるや、野の玉簪花の如何に生長かを賭よ、勞がす紡ざるなり。我なんぢに告ぐ、サロモンも其榮華を極めたる時にすら此花の一ほどに装はざりき。

今日は在りて明日は爐に投げ入れらるゝ野の草をさへ神は斯く装ひたまへば、况して汝等をや、嗟、信仰薄き者よ、されば汝等何を食ひ何を飲み何を衣んと慮かる勿れ、此等の物は皆異邦人の索むる所なり。汝等の父は此等の物の皆なんぢらに必要なるを知りたまへり。故に先づ神の國と其の義を求めよ、然らば此等の物は皆なんぢら

に加へらるべし故に明日を感かる勿れ明日の事は明日みづから感  
 からん、一日の苦は一日にて足れり。」  
 耶穌基督は人類が全く亡失した天國の道を教示するために降生せられ  
 たのである。されば上に引用せる聖言を讀めば吾人は何となく地上よ  
 り高められて一層清淨潔白に一層平安に一層悦ばしき天上界に携へ  
 られたるやうな心地がする。上に掲げたるものは長き山上の垂訓の拔  
 萃に過ぎぬ。是は宜く福音書に就きて其全部を熟讀靜思すべきである。  
 吾人は之を讀んで此教訓を垂れたる者は地上の者でなく、此世と此世  
 の萬事とを遙に超絶れたる者であることを感ずる。吾人は又彼は吾人  
 の靈魂を高め、其が出頭没頭して淤泥に染り、其の靈眼をして朦朧たら

しむるところの塵界より之を救ひ出さんとするを感ずる。靈魂は天よ  
 り出で、天に歸るべきものなれば彼は之を上天に引き揚げんと努む  
 るのである。後日彼は神の三位一體、聖子の托身、十字架の立義、献祭及び  
 其他の信すべき眞理を教ふるであらう。けれども彼は先づ人心を上天  
 に高め、之を清め、之より地上の思想と慾念との重荷を取り去りて、光明  
 を受け容れることの出来るやうにしたのである。若し人の心情、其の良  
 心、其の意志が此の完全なる理想に一致するならば、其の睿智は如何に  
 立派になるであらう。又此の教訓を實現するならば、家庭、社會、國民、世界  
 は如何に美麗くなるであらう。若し聖人傳を細かば、是等の教訓を文字  
 通りに實行したる者を見ること出来る。其人の德行は實に美しく人



人は之を見て痛く感歎し彼等を神の如くに崇敬したのである。されば福音書は此の山上の教訓を終るに次の言を以てしたのは毫も怪むに及ばぬのである。

「耶穌此等の言を宣べ竟へたまへる時群衆其の教誨を驚歎さぬ其は彼等の中なる學士やファリゼオ徒の如くならず權を有てる者のごとくに教へたまひしが故なり」

けれども此の山上の垂訓は長く且つ感歎賞美すべきものであつても耶穌基督の教訓を悉皆殘らず包含するものでないことは明白である。福音書を通讀すれば此外の處にも次の如き深玄にして莊重なる思想を發見することが出来る

「人若し我にツイいて來らんと欲せば己を捨て己が十字架を擔ひて我に従へ。」

己の生命を救はんと欲する者は之を失ひ我がために己の生命を失ふ者は之を得べし。

人全世界を贏け獲るとも若し其靈魂を損せば何の益かあらん又人何を以てか其靈魂に易へんや。

抑も人の子は其父の榮光を以て其の使等と共に來らん其時各々に其の行爲に循ひて報いん」

是は深思熟考を要する語である而して多數の撰れたる者は此聖語を沈思熟慮して蹶然として起て耶穌基督に従ひ地上の萬物を拋棄し

て完全なる生活に入るのである次に掲ぐるものも同様に静に深く観想すべき真理である。

「其時弟子たち耶蘇に詣りて曰く天國にて大なる者は孰なるか耶蘇孩兒を召び之を彼等の中に立て曰く汝等もし改まりて孩兒のごとく成らずば天國に入るを得じ。

故に凡そ此の孩兒のごとく自ら謙たる者は是れ天國にて大なる者なり。

又我を信ずる此の小子の一人を躓かする者は驢馬のひく磨を其頸に懸けられて海の深底に沈めらるゝに如かざるなり。

躓礙の至るに因て世は禍なる哉躓礙は來らざるを得されども躓

礙を來す人は嗟禍なる哉。

汝等慎しみて斯の小子の一人をも侮蔑るなかれ我なんぢらに告

ぐ天にありて彼等の天使たちは天に在す吾父の面を恒に觀れば也」

耶蘇は斯教訓に於て神は如何に謙遜なる人虚飾なき人及び正直なる人を愛したまふかを示された神の見たまふ所は吾人の意向である、吾人は果して衷心より天の光明を受け容れることを望むか如何かといふごとである此處に耶蘇は何故神は其眞理を賢智者や聰明者に隠して小き者等に之を顯はしたまふかを知らしめたのである。

又次に掲ぐる放蕩子の譬喩のやうに美しく單純無飾で罪人の慰藉となり神の善良にして慈悲深き大御心を善く知らしむる話が何處に

あらうか。

「或人二箇の子あり、其中に季子その父に言けるは、父よ、我に歸すべき家産の分を我に予へたまへと、父乃ち家産を彼等に分てり。

幾日もあらぬ後、季子は一切を掻集めて他國へ遠く旅立ち往けり、而して彼處に奢り生活しつその家産を浪費せり。

己に一切を蕩盡せし後、かの國に大饑饉起りて、彼漸く乏くなりぬ。是に於て彼往て該國の某市民に縋りつきたれば、酒ち之を其田庄に遣りて、豕を牧しめき。

今は豕の食ふ豆莢を以てなりとも其腹を充さんと欲したれども、誰も彼に與ふる者なし。

彼やがて自ら省悟て曰く、吾が父の家には麩餅に飽る傭人幾多なるぞや、然るに我は茲に饑て死なんとす。

起て吾が父に詣りて之に言ん、父よ、我は罪を天にも獲また汝の前にも獲たり、今は汝の兒と稱するに足らず、請ふ我を汝の傭人の一人のごとく見做したまへと。

彼すなはち起あがりて、其父に詣りけるが、尙遠くありしに、其父之を認めて、悲憫を興し、趨り往きつ、其の頸を抱へて之に接吻せり。兒乃ち之に言けるは、父よ、我は罪を天にも獲、また汝の前にも獲たり、今は汝の兒と稱するに足らず。

父、その家僕等に言けらく、疾く最上の衣服を取きたりて、彼に着せ

よ、指輪を彼が手にはめよ、履を彼が足にはかせよ、而して茲に肥たる  
 犢牛を牽來て宰れ、我等食ひて宴樂まんとす、吾が此兒や死にて復生  
 き、失て復得たれば也」と即ち宴樂み始む」  
 如何なる罪を犯しても之を痛悔だにすれば神は常に之を赦したま  
 ふことを之よりも善く説き示すことは出来ぬであらう、されば全く失  
 望せる罪人も福音書中の此話に勵まされて一旦遠かつた正路に立ち  
 返れる實例は數へ切れぬ程澤山ある、彼等は此話の放蕩子のやうに聖  
 父の許に立ち返り、新なる生涯を始め、新なる人と成た。  
 耶穌基督の教訓の崇高深遠にして總ての哲學者と總ての聖賢との  
 教訓に遙に超絶て居ることは上に引ける聖言に據て明白である、世人

が基督と相並べ、或は其上に置くところの賢人哲士は釋迦、孔子、ソクラ  
 テス、プラトンなどである、其中ソクラテスとプラトンとに就ては茲に  
 詳細く論評せぬ、此二人の哲學者は理論上神の存在神の唯一なること  
 及び靈魂の不滅を認め、たけれども實際上より見れば、彼等の教訓は茲  
 に取り立て、言ふ程の効果を毫も生せぬのである。  
 次に孔子に至つては、彼が修身、齊家、治國、平天下に關し、頗る適切なる  
 教訓を垂れたことは、何人も否認することが出来ぬ、彼は其の當時の人  
 人に共同生活の實行に於ける聖賢の理想を立て示めした、彼は天命之  
 謂性、率性之謂道、と言て萬物の性質中に顯現る、天の命令を以て  
 道徳の基礎とした、彼の智慧ある教訓は支那及び日本に於る文明に大

なる影響を及ぼしたることも争ふべからざる事實であるけれども孔子の道德教に一大欠陥がある。其教訓の中には實に立派で、吾人の稱讃を價し上機上根の人は善に對する自然の傾向により其行為の規矩準繩として採用し得べき者があるにも拘らず、多數の人類の爲には只言辭上の美しき教訓に止りて之を實行せしむる力が無い。其理由は孔子の教には確乎とした基礎が無く、自然の正義の要求する制裁が欠けて居るためである。猶ほ一層詳細く之を説明すれば孔子が其の道德の基礎とする天の命なるものは實際人性の聲に外ならぬ。故に儒道にては人性は善ばかりであると假定して結局人を以て道德法の源泉となし根本となすのである。斯様な曖昧なるものを道德の基礎とすれば人性

の解釋次第で随分我儘勝手な道德も成立つことが出来る。加之儒道即ち孔子の教は靈魂の不滅も來世の存在も教へざる純然たる現世教であるから其道德には制裁が無い。盜跖の如き悪人も生涯其不義の幸福を享受し、伯夷叔齊の如き善人も正義の爲めに餓死し而して兩方共に齊く墓場の土と化し去りて死後に何の残るところが無くば道德に何の制裁があるであらうか。儒教は斯の如く確乎たる基礎と制裁とを欠如するが爲め人類の大多數に其教訓を實行せしむる力が無いばかりでなく、基督教に見るやうな潔白献身博愛の理想を欠如して居る孔子は疑もなく大聖人であつた。神が此世に來る總ての人に賦與るところの良心の光は彼の内に赫々と照り較いて居つたけれども

孔子を基督に比較するのは恰も「ランプ」を太陽に比較する如くである。暗い夜の中に於ては「ランプ」も其光明を以て四圍の人を照らすけれども一朝太陽が東天に昇れば「ランプ」は全く其光を失ひ用をなさぬのである。儒教の根源は人間の智慧に在る隨て其眼界は此世の地平線を出ることが出来ぬ。基督教は眞善美の本源なる神より發出し永遠に至るまでの人間の運命を包含する造物主にして人の審判者なる神の意思を以て日常普通の道徳の深大なる基礎となし、道徳に與ふるに義務の性質を以てしたるが故に萬人をして之を守らしむる力があるのみならず人類中の精英なる上機上根の人に供給するに人間が神の佑助によりて到達し得べき完徳の最高模範を以てする。

更に眼を轉じて釋迦の道徳教を見るに如何にも佛教の創立者は誰よりも多く慾情と闘ひ塵世の愛着を絶ち、禽獸蟲魚に至るまでも普く愛すべきことを教へ、且つ其教訓は自己に對し他人に對して守るべき至善至潔なる幾多の金言を包含して居る。

けれども斯様なものは佛教の特性本色ではない何となれば上に述べたる如き人間日常の義務に關する特別の教訓は人の良心が前に言た凡そ此世に来る人を悉く照すところの自然の光明に従つて多少明白に之を知ることが出来るからである。佛教の本領は是等の教訓に在らずして寧ろ其の道徳の基礎となつて居る哲學主義に存するのである。而して釋迦の道徳教が孔子の夫と同一力が無いのは此哲學主義

が聰明なる理性の眼より見れば不完全であるからである。佛教の哲學主義に據れば道德に必要な義務の力を滅却して了ふのである。隨て其道德に眞正確實なる基礎を與へることが出來ぬのである。吾人は茲に佛教の教義を批評せぬ、其の常住不變、絶對完全なる實在即ち眞如と變幻出沒、相對不完全の萬有界との根本的一致なるものは非論理極される反對物の一致なること及び偶然的なる即ち他を待て始めて存在し得べき萬有が無限なる鎖の如く連續すと做すは其の最始の環までも不變絶對なる大原因に固定せられず、漫然空中に懸るが如き觀あること等は茲に委く論評することが出來ぬ。

吾人は單に佛教にて其道德の基礎となすところの哲學主義なるも

のが如何に不合理にして且つ薄弱なるかを示すを以て満足せねばならぬ。例へば佛教にて善く言ふところの因果の法則なるものは之を制定し、之を遵守せしむるところの智慧あり、威力あり、聖徳と正義とに由りて活動する者がなければ何であらうか。佛説にては自我なるものを否認するが、果して然らば人の道德上の責任は何なるであらうか。自我も個人も存在せずとせば前世に犯せる罪業の償贖とか、前世に行へる善業の應報とか云ふことは一體何と言ふことであらう。又佛教の基本たる汎神論や萬有と實在即ち眞如との根本的一致を以て如何して悪や不完全の存在および善惡正邪の區別を合理的に説明することが出來るであらうか。

之を要するに佛教の道德は眞面目なる基礎を欠如するが故に儒教と同一人類の多数に取りては單に書冊の上の教訓美しけれども空しさ格言に過ぎぬのである。義務として強制的に之を實行せしむる力がないから其の之を守ると守らざるとは一に繋つて人々の嗜好に在るのである。基督教の如く否やでも應でも之を守らしむる力がないのである。

されば釋迦、孔子、ソクラテス、プラトンなどの教を耶蘇基督の教と比較する者は盲目者か左もなくば無知無識なる者でなければならぬ。基督教に於ては凡ての事が明白で確實である。天地萬物の造者主宰たる神が人々の靈魂を創造し、之に其の守るべき法則を銘刻し給ふた神は

萬事を見、萬事を知り給ふ極めて秘密なる思想や欲望までも明かに見知り給ふのである。而して人々の死ぬる時に其の行爲に従つて各人の運命を御定めになるのである。基督教に於ては斯の如く凡ての事が道德に其の義務的性質を與へるやうになつて居る。吾人は獨り基督教に於てのみ道德に最も適切なる基礎と制裁とを發見するのである。

第二章

耶蘇基督の宣教及び奇跡が群衆の

上に生じたる結果に由て其超人性を證す

如何なる國の歴史を見ても耶蘇基督のやうに多勢の人を自己に引



寄せたる者は見ることが出来ぬ。耶蘇基督が宣教に従事せる三ヶ年の間は絶えず著るしき群衆が彼に附随つて居つた。成程人民は常に珍しき事を見聞したがるものである。何か常と異なる事があると聞けば容易く群集するものであるけれども基督の場合に於ける集合なるものは一日や二日のことでもなく、二百や三百の人でなく、一ヶ所や二ヶ所のことでない。何千といふ男女の大群衆が耶蘇基督の説教に心を奪れ、其の絶えず行へる奇跡に驚かされて四方八方より雲集し來り断えず彼に隨行したのである。福音書に據れば特別に基督が或奇跡を行へる後、その附近の諸國は全く基督を見んとする熱心に滿され群り來る無数の群衆は感歎の餘り生活に必要なものを準備することまでも打忘

れたとある。

次に福音書の中より耶蘇基督の宣教と奇跡とが如何に深大なる影響を及したるかを明に示すべき章句を引かう。

「一日耶蘇が會堂にて人々に聖教を宣傳へける時一箇の癩病者彼の許に來り、彼に願ひ、跪づきて彼に言けるは

汝もし欲せば必ず我を淨むることを能したまふ。耶蘇彼を憫み、其手を伸て之に捫りて、曰く、我欲す、淨まれと、之を言たまふや、直に癩病彼を去りて、彼淨まれり。次に耶蘇は誰にも之を語る勿れと、嚴く禁めて彼を去らしむ。然るに彼出て、其事を公言にし、且布揚はじめたれば、耶蘇其後は顯然に邑に入るを得ず、惟外にて寂寞き處に居りしが、四方

より人々彼に群集れり」

次に掲ぐる福音書の記事も亦耶穌基督が如何に群衆に圍繞れ隨喜  
渴仰せられたるか如何なる權威を有したるか又如何なる影響を及ぼ  
し熱心を惹起したるかを最も善く示すものである。

「數日の後耶穌復カファルナウムに至りしが彼が家に居ること聞こ  
えしかば人々夥だしく集り來り門口にさへも隙間なきほどなりき  
而して耶穌言を彼等に垂れたまへり。

茲に一個の癱瘓者を四人に昇せて彼に携へたる者ありしが群衆  
のために妨げられて之を彼に致すこと能はざりしかば彼が居れる  
處の屋蓋をめぐりつ之を開きて癱瘓者の臥せる床を絶下せり。

耶穌彼等の信仰をみて癱瘓者に言けるは子よ汝の罪は赦るさる。  
或る學士等彼處に坐しゐて其心に謂らく彼何ぞ斯く言ふや是れ裏  
瀆なり神の外誰か能く罪を赦るさんや。

耶穌彼等が裏に自ら斯く念へるを直に其の心に知りて彼等に言  
たまはく何ぞ汝等の心に斯く思ふや……幸人の子地にて罪を赦す  
の權あることを汝等に知しめん爲め癱瘓者に曰ふ我なんぢに告ぐ  
起きて汝の床を携へて汝の家に往け彼忽ち起きて床を携へ衆の前  
にて去りゆきければ皆異みて神を稱讚て曰ふ我等未だ斯の如きを  
觀すと」

又彼は一日カファルナウムの會堂にて教を説いた衆人は皆其教を

驚き、威嚇に勝えなかつた。

「其の會堂に汚鬼に憑れたる人あり、叫びて曰ふ、ナザレトの耶穌、我等と汝と何の與る所か、あらん、我等を亡さんとて來れるや、我、汝は誰なるを知る、即ち神の聖者なる也。」

耶穌彼を戒めて曰く、黙せよ、其人より出でよと、汚鬼すなはち彼を拘撃させ、大聲に叫びて彼より出でさりぬ、衆驚きて、遂に互に相問らく、嗚呼、是は何事ぞや、是は何等の新しき教ぞや、權を以て號令すれば、汚鬼すらも順ふなり。」

會堂を出てシモン（ペトロ）の家に到り、其の姑の熱病を愈し、さて夕暮に及びて、日没の後、人々諸の疾病ある者及び惡魔に憑れたる者どもを

耶穌に携へ、邑中舉りて門口に集まれり、彼すなはち種々の疾病を患はるる者を多く醫し給へり。」

又一日安息日に、隻手瘥たる人を醫しければ、律法師と、ファリゼオ徒等は安息日に病人を醫すは違法の行爲なりと、傲し、耶穌を驚さんために、謀議を凝したけれども、耶穌は其弟子等と共に海濱に危難を避けた、然るに

「群衆夥だしくガリラヤ及びユデヤより到りて、彼に従へり、又イエルザレムよりイドメヤよりヨルダンの對方よりも然り、且チエロとシドン、の邊よりも大群衆、彼が行ひし事を聞て、彼に來り就けり、彼群衆の恐くは、雜沓し來るならんとて、既に小舟を備へて己の用に供せん

ことを其弟子たちに命じおきぬ。是は彼すでに許多の者を醫せしに因て、凡そ疾病あるほどの者みな彼に捫らんとて擠逼りたれば也。又或時其弟子すなはち使徒等は食事をするの暇だも無かつたとあ

る  
〔彼等使徒等〕耶蘇と俱に家に入りしに群衆復も集りつ、彼等をして餅を食ふにだも違わらざらしめき。

ユデヤとガリレアとの途上を耶蘇が往來せる時には群衆其通路に推し逼り動もすれば壓潰されんとする程であつた。次の記事は之を證する。

〔耶蘇船にて復海を濟りしに大群衆かれに集まれり、彼は海濱に居る。

時に會堂の一箇の長ヤイロといふ者來り、耶蘇を見て其足下に俯伏し、切に彼に願て曰く、吾が女子死に瀕す、請ふ來りて、彼が上に手を按きたまへ、然らば必ず拯かりて活きん。耶蘇彼と偕に行きけるに、大群衆耶蘇に隨ひて、之に推し逼れり。

十二年痔瘻を患へる婦あり、……彼耶蘇の事を聞しかば群衆の中より彼が後に來りて、其の衣に捫れり、……然るに彼其の血の出るところに止り、既に其の疾患の瘥たるを身に感じたり。

耶蘇直に靈能の己より出でたるを自ら知りつ、群衆を顧みて言たまはく、誰が吾の衣に捫れるぞやと、其弟子等かれに言けるは、群衆の汝に推逼るを見ながらも猶誰が我に捫りしぞやと宣ふや。

其時婦恐れ且慄さつ其の己が身に爲されたる所を知りたれば來りて彼の前に俯伏し具に實を申せり。耶穌彼に言ひたまはく女よ汝の信仰なんぢをして拯らしめたり安んじて往け汝が痼疾は癒たり。耶穌宣教の三年間は毎日此の通りであつた群衆は彼に寸間の休息をも與へなかつた彼が少し休まうと思つて弟子と共に寂寞き處に退けば群衆は忽ち彼を捜し出して其處に馳集つたのである。

耶穌彼等使徒等に言ひたまはく別に寂寞き處へ來りて少しく休めと是は來りたり歸りたりする者多くして彼等食する暇だも無かりければ也彼等すなはち船に登りて別に寂寞き處へ行けり然るに彼等の行くを見て多く之を知りたれば諸の府邑より人々徒歩にて彼

處へ馳集りつ彼等に先だちて其處に至り居れり。

耶穌出て群衆の夥だしきを見しに牧者なき羊のごとくなりしかば之を憫みたまひ多くの事を之に訓へ始む。

日すでに昏たれば弟子たち進みて曰く此は寂寞き處にして時は既にたてり請ふ彼等を去らしめ四邊の田舎または村々に往きて己己に食ふべき物を活はしめたまへ。耶穌答へて彼等に曰たまはく汝等これに食を與へよ。彼等耶穌に言ひけるは我等ゆきて二百デナリヨの麪餅を活ひて彼等に食はしめんか。彼等に言ひたまはく麪餅幾頭あるや往きて見よと彼等知り居れば對て曰ふ五箇と魚二尾あり。耶穌即ち衆を青草の上に組々に坐せしめよと彼等に命じければ百

または五十宛列をなして坐せり。

耶穌乃ち五頭の麩餅と二尾の魚を取り天を仰ぎて祝し、麩餅を擘き、其弟子等に與へて衆の前に陳しめ、二尾の魚をも亦衆に分てり、皆食ひて飽きぬ、殘遺る屑を拾しに、魚とともに十二の筐に満てり、食ひし者は五千人なりき。」

單に是等の事實に就て觀るも群衆は耶穌基督を以て一と通りの天才とか豪傑とかいふ者以上の成者と爲せることが明瞭である。而して斯様なる事實は只一回ばかり有たのでない、或時耶穌がガリレヤの海邊にて山中に退き暫時休息で居られた時にも之と同様の事が有つた。「大群衆やがて匿者醫者跛者殘疾および其他衆多の者を伴ひて彼に

就き、其足下に此等を置しに、皆之を醫したまひければ、群衆は匿者の言ひ、跛者の歩み、醫者の見るを觀て、深く奇み、且イスラエルの神を崇めたり。時に耶穌其弟子たちを召びて曰ひたまはく、我この群衆を恤む、彼等われと共に既に三日續て居り、今や食ふべき物なし、空腹にして之を去らしむるを欲せず、恐くは途上にて弱らん、弟子たち彼に言ひけるは、然らば我等かゝる群衆を飽しむべきパンを野にて何處より獲んか、耶穌彼等に言ひけるは、パン幾頭有てるや、彼等いふ七頭のパンと些少の小魚のみ、耶穌群衆に命じて地に坐せしめ、七頭のパンと其魚を取り、擘して擘き、其弟子たちに與へ、弟子たち之を民に與ふ、皆食ひて飽き、殘餘の屑を拾ひしに、七の筐に盈てり、食ひし者は婦女

と幼童の外、四千人なりき。」  
 是に由て之を觀れば、常々耶穌基督に隨へる群衆は數千人より成れる大群衆であつたことが知られる。何と大した引力ではないか。福音書の歴史的正確と其記事の眞實無謬なる事とが絶對的に明白に證明せられなかつたならば、是等の事實を疑つても全然無理でもなからうと思はれる程である。されば耶穌基督は尋常一般の偉人豪傑以上の者であつたことを示めすために、此外の證言を茲に引用する必要はあるまい。けれども茲に遺るべからざる猶ほ一つの事實がある。夫は群衆が耶穌基督を渴仰する事は、其の生涯の最終日に至るまで繼續したといふことを示すものである。敵黨は彼を深く憎みて種々の陰謀を逞したけ

れども人民の渴仰心を彼より取去ることが出来なかつた時は、逾越節すなはち耶穌御死去の六日前であつた。  
 「該祝祭に來りてありける大群衆は翌日耶穌イエルザレムに來りつゝありと聞くや、莫大の群衆おのれの衣服を道に鋪き、或者はまた樹の枝を伐りて、道に鋪けり。先に行き後に從ふ群衆呼はりて曰く、ダヴキドの子にホザナ！主の名を以て來る者は祝せられ給へ、至上なる處にホザナ！  
 彼イエルザレムに入りしに、都中舉りて騒ぎ立ちて曰く、彼は誰なるや、民ども言へらく、彼はガリラヤのナザレトよりせる預言者耶穌なりと。」

斯の如く耶穌基督は雲霞の如き大群衆に擁せられて京城に凱進せられた群衆の中には富める者も有りたれど一層多くの貧乏者病める者及び不幸なる者が居つた母親は哺乳を抱きつゝ、耶穌の傍に推し通り、童輩は喜び躍つて其前に走り、群衆と共に耶穌の讚美を叫び歌つた其熱信渴仰は普遍的であつた老弱男女貴賤貧富の差別なく皆残らず耶穌を歓迎し、讚美した實に空前絶後の壯觀であつた。

第三章 耶穌基督の普遍なる人格に由りて  
其超人性を證す

耶穌基督の特徴中最も靈妙不可思議で最も解すべからざるもの、

二つで彼をして絶類離群の者たらしむるものは其の普遍なる人格換言すれば彼をして凡ての時代の人凡ての邦國の人たらしむることである。一般に人格は時代場所人種の制限を受くるものである。小人物でも大人物でも人は皆或時代に生れ或邦國に住ひ或國民に屬し其印象を佩ふるものである。世の偉人豪傑なる者を見よ、彼等は皆な其時代の人である。其時代の利害休戚感情吉凶禍福を代表して居る。彼等は其時代に發見する資力と機會とを巧に利用し、困難や不利益と善く闘ふ者である。是は政治家立法者および征服者に於ては特に明白にして疑を容るべき餘地がない。彼アレキサンデル、セザル、ナポレオンには、共通普遍の行動法が無かつたのみならず若しも彼等が其時代的人物で無か



つたならば何に據て世界を治め之を震撼したであらうか。

獨り政治家や立法者の類ばかりでなく、詩人、哲學者、藝術家の如き者  
にても時代の影響を蒙らない者があるであらうか。彼等の作物の中に  
は人靈の氣息即ち其人靈が祈り、泣き、苦み、愛したる時代國民都市の氣  
息が髣髴として通ひつゝあるを感じ得るではないか。試みにホメル、ヨ  
ブ、イザヤ、ソクラテス、プラトン、タシト、シエークスピア、ミルトン、コルネ  
ーユ、ボスエの作物を執りて之を讀め、ホメルの中には希臘ヨブの中  
にはアラビア、イザヤの中にはユダヤ、タシトの中には異教者のローマ、コ  
ルネーユとボスエの中にはルイ十四世時代の佛蘭西があり、と印  
象せられてあることを發見するであらう。而して其作品が立派であれ

ば立派であるほど其時代の精神と其國民の特性とを最も善く體現す  
るものである。夫故吾人は希臘詩人の大家はホメルである、アラビヤ詩  
人の巨擘はヨブである、ヘブライ詩人の泰斗はイザヤである、シエークス  
ピアは偉大なる英國人である、ボスエは大佛國人即ち佛國人の代表  
的人物であると言ふのである。けれども耶蘇基督をば吾人は何と言ふ  
であらうか。吾人は彼を呼んでヘブライ風の人も希臘的若しくは羅馬  
馬的人とも古代型若しくは近代流の人もと言ふことが出来ぬ。耶蘇  
基督に就て吾人が言ひ得ることは唯一つある。即ち彼は人であると言  
ふことである。換言すれば時代と人種とに制限せられずして全人類を  
體現せるものであると云ふことである。

而して耶蘇基督に於ける此の普遍的人格は決して無人格ではないと云ふことに善く注意せねばならぬ何となれば吾人は耶蘇基督の人格のやうに高尚で明確なる人格は他に之を發見する能はざるゆゑである誰か嘗て耶蘇基督よりも強く「我」といふ語を先生らしく用ひた者がある何處に彼の如き完全なる獨立不羈の行動をなせる者がある彼は如何なる人にも屬せぬ彼を喝采する郡衆にも其弟子等にも其時代にも其國の思想慣習にも屬せぬ何人も彼の師であつたと云ふことが出來ぬ實に彼が其獨得の普遍性に到達したるは其の超絶せる人格に由るのであるされば彼は萬國萬代の萬人が齊く仰いで師表となすべき普遍的模範である歐羅巴人も亞細亞人も亞米利加人も阿弗利加人も

も阿西亞尼亞人も皆一樣に彼を以て完全無缺の手本と做すことが出来る老年の者も弱齡の者も富めるも貧きも貴きも賤きも皆同じやうに彼を真似ることが出来る男兒も女兒も父も母も鐵窓に繋る囚人も玉座に位する帝王も皆齊しく彼を手本と仰ぐことが出来る世は變り文明は進み思想は改まり風俗は新になり役者は別になつても耶蘇基督の模範たることは依然として變ることがない彼は第四世紀の野蠻人に研究せられ知られ模倣せられ禮拜せられ愛慕せられたる如く第十九世紀の文明人にも然せらるゝのである彼等の習慣や風俗や思想や天地雲泥の懸隔があるけれども耶蘇基督を無上の模範と仰ぐことは古今全く同一である斯様に耶蘇基督は普遍的で萬人の同情を

引き、萬人に適應するのである。古往今來萬國萬人は彼を模範と仰いで居る。縦ひ一人も未だ曾て彼と同等の境界に達し得た者は無くとも、斯の如く基督教は世界萬國の氣質も特性も風俗習慣も文明も思想も全く相異なる人民中に弘まり而して如何なる國如何なる風習にも同様に善く適應し得るといふことは實に靈妙不可思議なる現象ではな  
いか。

他宗教の開祖は斯う甘くは行かぬ。マホメットは「マホメット」教若しくは回々教と稱する新宗教を建て土耳其人と亞刺比亞人との風習趣味に之を適應せしむることは出来たが、其他の邦國には彼程に勢力を張ることが出来なかつた。釋迦は婆羅門教に改良を加へて佛教を開き

之をして亞細亞人種の風習趣味性向に適應するものと做らしめ、たけれども、其他の國民には宗教として之を信奉せしむることが出来なかつた。由來印度と東歐との交通は夙に頗る盛であつて、従つて印度北部より東歐の地方へ佛教の傳へられたことは基督教の現はれる前後に亘つて屢々有つたが、遂に之を宗教として奉ずる者は出なかつたのである。然るに基督教は世界萬國に弘り、耶蘇基督は萬邦に於て彼を知る萬人に愛慕せられ禮拜せられて居るのである。

#### 第四章 耶蘇基督の献身無慾に由りて其超

##### 人性を證す

自己を忘れ利慾を離れ神の爲め他人の爲めに一身を奉獻し自ら甘

じて其の犠牲となることは眞誠なる聖徳の試金石である人は生れながら利己的である、傲慢、自愛の凝塊である、凡て自家の意見、利益、安樂、平和、安息に關係を有する事物に愛着するものである。

試みに世の偉人傑士、大人君子、高材疾足と呼べる者の傳記を檢べて見よ、多少利己心の無き者は一人も見出すことは出来まい、唯一人例外の者がある、斯人はいくら善く其傳記を檢しても、毫も利己心の痕跡を發見することが出来ぬ、其人は即ち耶穌基督である、福音書を開いて彼の言行を仔細に檢べ見よ、何處を見ても爲我とか利己とかいふやうな心より出たと疑はるゝ言行を毫髮だも認むることが出来ぬであらう、其死に至るまで彼は自己に托せられたる使命を全ふするために働

いた、而して其使命は神の光榮を回復し世の人々の救拯を獲ることであつたから最も完全なる献身犠牲を要するものであつた、されば彼は自分の嗜好や性向などは毫も顧みず、一向天の聖父の聖旨に服従したのである、彼は嘗て言た「我は恒に我が聖父の喜したまふ事を爲すと、聖ポロも其の羅馬人に贈れる書翰(十五の三)の中に基督は毫も己を悦ばず事を爲さざりき」と書いてある、試に福音書に就て、耶穌基督が己を悦ばすため、或は世人の尊敬を得るため、或は難儀骨折を避くるために爲したる行爲を捜し見よ、諸君は決して之を發見し得ぬであらう、彼は若しも欲望ば最も幸福なる人生の快樂を享けるとが出来たに相違ない、けれども彼れは自から甘じて苦痛を擇び取つた、貧賤さ生涯を擇び取

つた而して其の崇高なる献身的精神と従順の精神とは彼をして従容として死而かも十字架の死に就かしめ此の惨刑酷罰に伴ふところの苦痛と耻辱とを顧ざらしめた而して何の爲に彼は之を爲したか彼は之に答へて曰た我は己の旨を成さんことを求めず惟我を遣はせる者の旨を成さんことを求むと又曰た我もし我に來るべく汝等に勸むとも开は我自らに榮譽を來たすため汝等を我弟子となすことを要するために非ず我は人よりの榮光を受くる者に非ず开は惟汝等を救はんが爲なりと

一日彼が五頭の麩餅と二尾の魚とを以て五千人を飽しめたる時人民は彼の爲せる異徴を見て非常に感歎し彼を王となさんとしたけれ

ども耶穌は彼等の心を曉り遁れて山中に隠れた若しも彼に少しにても名譽心があつたならば儘に此好機會を利用したであらう(約翰福音六の十五)翌日此の不思議なる麩餅を食ひたりし群衆彼の許に集り來りける時彼は彼等に告ぐるに後日猶ほ一層驚くべき麩餅を彼等に與ふべきことを以てし且その麩餅は彼自身の肉體であるべきことを告げたけれども彼は彼等の信仰を試るため如何様にして又如何なる形相の下に之を與ふべきかを説明さなかつたから其の弟子の中數多の者は斯様な言を曉ることも信ずることも出來ないで耶穌を見捨て、退き去つた彼は弟子等の退き去るのを見て少からず悲んだ、是は決して自分の爲に悲んだのではなく是等の薄信なる弟子等自ら其

救拯を危殆するのを悲しんだのである。けれども彼は強て彼等を留めなかつた。彼は其言を信することの出来ぬやうな者を弟子とすることを欲まかつたのである。

猶太人の祝祭日に近ける時彼の兄弟たちすなはち彼の從兄弟たち（希伯來語には「從兄弟」といふ語がない。茲に兄弟と譯せる原語は一般に兄弟や從兄弟などの近き親屬を意味す。希臘譯にも「兄弟」を意味する *adelphos* を以て譯せども、耶穌には兄弟なきこと明かなれば茲に兄弟と譯せるものは彼の近親即ち從兄弟を指したのである）は未だ彼の使命の神性を信せず。惟彼が世に名聲を博したならば其餘光が彼等の上に波及ぶであらうと思つて彼に言たには「請ふ、此より轉じて、ユデアへ

往け。然らば汝の弟子たちも亦なんぢが爲す不可思議なる業を睹るを得ん。寔に誰人も自ら顯れんことを求めながら密に事を爲す者はあらず。汝もし此等の業を爲すならば己を世に彰せよ」と（約翰七の四）けれども耶穌は彼等に答へて「吾が時は未だ至らず。吾父の定めたまへる時來らば我己を世に彰すべし」と言た。

以上述る所に由りて觀れば、耶穌は自ら世人の尊敬を求むるために事を爲たことは毫髪も無かつたことが明白である。

彼が此世の財寶に心を置かなかつたことも同様に感心すべきものであつた。一日一箇の學士が近づきて彼に言た師よ、何處へ往きたまふとも我は汝に従はん」と。其時彼は答へて曰た「狐には穴あり、天空の鳥に

は巢あり然れども我には首を枕する處だになし故に汝われに従ふとも樂しからざるべし〔馬竇八の廿〕

實に彼は其言の如く貧賤に生れ貧賤に暮し貧賤に死んだ彼は他人の所有に屬する馬小屋の中に生れ一生涯の間彼の首を懸むる一塊の石だにも持たなかつた而して其死後は他人の爲めに鑿られたる墓に葬られた彼がナザレトに居た時には勞働にて暮し公の生活を始めてからは弟子たちと共に施與を貰つて暮して居つた彼は若しも望めば贅澤なる生活を爲すことが出來たに相違ない彼は一日五頭の「パン」を以て五千人を飽しめ又一日は七頭の「パン」にて四千人を満腹せしめた程の者でありながら自分は辛じて生命を維ぐに必要なるものゝ外は

何物をも持たなかつた此點に於ても彼は古今無雙である幾分か彼に倣つて清貧を守る者はあるが彼に及ぶ者は無い無論彼の手本となつた者は無かつたのである

けれども人或は言はん流石の耶穌も生命ばかりは惜かつたやうに見えるると如何にも彼は生命が其使命を全うするために必要であつた間は之を大事にしたけれども彼が此世に生れ出でたる目的は世の救拯の爲に其生命を犠牲に供することに外ならざりしを以て其父が定め給へる時が到來するや否や其生命其榮譽其名聲一言以て之を略すれば萬事萬物を犠牲に供したさりながら彼が惟一言にて敵の勢力を粉碎し得る大能を持って居つたことは橄欖の園にて彼が悪徒ばらに撃

へられたる時の有様を見て之を知ることが出来る。其時敵の大群衆は彼を撃へるために近いた。耶穌は之を見て彼等の前に進み出で、言つた。汝等は誰を尋ねるや」と。彼等は之に答へて言つた。ナザレトの耶穌を」と。耶穌乃ち彼等に言ひけるは。我なり」と。然るに耶穌彼等に向ひて。我なりと言ふや。彼等は後に退きて地に倒れたけれども。彼は彼等を容して再び起ち上りて己を撃へさせた。是は彼が前に預言した如く我等の救拯の爲に自ら甘んじて其身を犠牲とするためである。彼嘗て曰く。我は善牧者なり。我は吾が羊を識り、吾が羊は我を識る……我は吾が羊の爲に己の生命を捐つ。約翰十の十四、十五。また曰く。誰も我が生命を我より奪ふ者あらず。惟我自ら甘んじて之を捐つ。我は之を捐つるの權あり。また

再び之を取るの權あり。斯の命をわれは吾が父より受けたり。同章十八節。

是が生命を惜み、敵の力に抵抗し得ざる者の言であらうか。余は茲に繰返して言はん。試に史上に於て耶穌基督の如く一點の私慾なく、自己を忘れ、萬事を抛擲て、神と人との爲めに自己を犠牲に供せる者がありや否や、之を搜して見よと。諸君は決して之を發見せぬであらう。

第五章 耶穌基督の完全なる聖徳に由りて  
其超人性を證す

世に罪を赦して貰ふ必要を少しも感せぬ者があらうか。神と良心との前に恭しく其身を處き、眞面目に思言行に就て省察しても、神に對し、



他人に對し己に對して嘗て聊だにも其義務を欠いた覚えがないと言ひ得るものがあらうか使徒聖約翰は「若し自ら我は罪なしと言はば是れ自ら欺けるにて真理我等に在るなし」と言つた如何なる偉人豪傑と呼ぶるゝ者にて此白狀を免れぬ若しも高德の令聞ありて人々より聖人の如く尊敬せらるゝ人が一朝群衆の前にて我には罪が無い我は聖人である」と聲言して見よ人々は忽ち變に思ひ不快を覺えて其人の高徳を疑ふであらう何故か誰か其人が罪を犯すのを目撃したためであらうか決して然うではない惟我々の心は自然に誰にても苟も人間たる以上は自ら我は罪なしと言ふ資格がないと思ふ故である而して實際かやうなことを言ふ者は輕賤むべき傲慢者虚言者に相違ないの

である。

けれども茲に一人の例外がある即ち耶穌基督其人である彼は一日群衆に向ひ汝等の中誰か我を罪ありと證明し得る者ありやと言つた彼は極めて謙遜極めて潔白極めて聰明なる者であつた而して自己の無罪を幾度となく聲明したけれども誰も誰も怪みもしなければ咎めもしなかつたのみならず之が爲に世人の尊敬を失ふやうなことは少しも無かつた彼は到處に罪の惡み嫌ふべきを説き絶えず公衆に向つて汝等改心せよ悔悛めよ汝等もし悔悛めずば皆亡びんと絶叫した然るに彼自らは罪の赦しや悔悛が要ると思つた形跡は少しも認むることが出来ぬ聖パウロさへも罪人のうち我は首なりと言つた然るに彼は嘗て

胸を拊たことがない何人も彼が自家の罪のために痛悔の涙を流したのを見ない彼は一度も自分の思言行に就て後悔したことがない人は彼が他人の罪のため泣くのを見た罪深きイエルザレムの爲に泣くのを見た猶ほ彼は我等の如く人間で人の如く事を爲し人の如く生活し、苦み死んだ否な彼は他の人よりも多く罪惡と罪人との間に居て他の人よりも多く誘惑に逢たのである然るに彼は人類全體の救拯を飢ゑ渴く如くに求めながら嘗て一度も己自らの救拯を心配したことがない彼の良心は常に純潔清淨無垢にして無上の靜穩と平安とを保ち嘗て聊かの後悔も不安も經驗したことが無かつた寔に彼は良心の責を受くるやうな事は夢にも爲たことがなかつたのである。

其當時の人なかんづく彼に接近せる者彼と親く交際せる者は彼の心靈の此上なく完全純潔であるのを確信して居つた彼の言動行動は實に雄大高尚平靜の極致であつた何人も彼の心靈の完全無缺清淨無垢なることを夢にも疑ふことが出来なかつた弟子等は始より彼の圓滿なる徳行を見て痛く感心し而して此感歎の情は日に月に増すばかりであつた。

斯の如きは彼の反對者と雖も柔かれざる感じであつた「ファリゼオ」徒司祭學士の徒輩は耶蘇の宣教の始より彼の行へる奇跡と彼の教訓を聴かんが爲に馳せ集れる群衆とを見て嫉妬の炎を燃し如何にもして彼を亡き者にせんと欲するまでに彼を憎んだ憎みの爲に神經の鋭

敏となれる彼等は早くも罪過と耶蘇の使命とは兩立し得べからざることに感付き、彼を斃すの良法は其罪過を發見するにありとなし、到處に尾行し、絶えず彼の言行に注意し、彼を其術策中に陥れんことを努めた。されば耶蘇は冬の夜路に一群の狼に追跡けらるゝ旅人の如く、若しも一步踏み損つて躓き倒れたならば最早如何ともすることの出来ぬ身となつたのである。斯の如く耶蘇は其公生活の三ヶ年間をば始終豺狼の如き悪徒輩に追跡けられて送つたけれども、彼等は不完全なる或は罪となるべき唯一つの言唯一つの行をも彼の身に見出すとが出来なかつた。彼等の彼を憎む心が其頂點に達し、百方彼を死に陥れんと腐心せる時に方り、彼は彼等に向ひ靜平にして威嚴ある態度を以て謂

た「汝等の中誰か我を罪ありと證明し得る者あるか」と而して誰も之に應へることが出来なかつた。此時に方り、若しも彼等が彼に非難すべき點を少しにしても知つて居つたならば、慥かに何とか應へたであらう。耶蘇基督の外に敵に向つて斯様な言をなし得る者が世の中にあるであらうか。彼は又彼等に向つて謂た「汝等は如何なる罪のために我を殺さんと欲するや」と。其時彼等が答へて謂たには「我等が汝を殺さんとするは毫も他の理由なし、惟汝が人間にてありながら自ら神なりと稱するが故なり」と。而して耶蘇が自ら神なりと稱せる事の當否は後に論述する所を讀んで之を知ることが出来る。

されば耶蘇基督は其德行の清淨無垢なる點に於ても實に空前絶後

であるけれども彼の聖徳は單に消極的に止りはせぬ換言すれば少しも罪が無く又少しも不完全な點が無いばかりではない其の特徴は總ての美德の花が爛熳として咲き揃ふて居ることであるありとあらゆる美善美德は彼に於て悉く其發展し得る限りまで發展し其理想に達し其最高點にまで上り如何なる大聖人が其全力を傾注しても到底之に及ぶことが出来ぬのである而して各の美德が彼に於て斯の如く圓滿絶對に發達しても決して其反對の徳を傷害ふやうなことは無かつた善く世間で言ふ通りに人は常に其の美點長所に對應する弱點短所を有するものである例へば柔和温順なる者は兎角優柔不斷に流れ易く氣前者は常に浪費に陥り易いやうなものである獨り耶穌基督に於

ては其の謹嚴なる性行は毫も其の慈愛を損するとなく又善く人間のあさましき心と罪深き行とを知悉きたれども人を愛する心を失ふやうなことは更に無かつたのである又試に彼の美德を残す執つて執れが最も美であるかを考へよ然らば其諸徳は完全なる比例と醇乎たる調和とを保てる一體に融和するを發見し感歎措く能はぬであらう。彼の諸徳は完全なる調和を保ち上下優劣の區別を立つること能はざるのみならず尙ほ注目すべきことは其の諸徳が常に同一の高度を保つことである彼の諸徳は變動なく起伏昇降なく時としては強くなり時としては弱くなるやうなことが無い耶穌基督に於ては他の人に於るが如く時としては人類以上の崇高に上昇し然る後平々凡々なる

人の水平に下降するやうなことを見ぬ彼は絶えず最高徳の頂上に翔翔し而も完全なる天真と獨特の單純質朴とを失はなかつた彼に於ては彼の前驅者たる洗者ヨハネ預言者エリヤ及びエリゼアに於けるが如き人を恐怖れしむるほどの謹嚴なく總てが單純平易通常であつたけれども善く注意して觀れば其徳は何の苦もなく骨折もなくして總てを超越するものであることが分るその崇高なる謙遜苦行仁愛神との和合等の諸徳は一見自然に平易に見ゆれども一朝之を模倣んとする時は忽ち到底企及ぶべからざることを發見するであらう。

猶ほ又苦難は完全なる道徳の試金石である故に是も彼に逃されなかつたあらゆる艱難苦痛は彼の身の上で落下してあらゆる美德を遺

憾なく發揮せしめた彼は謂た「貧き者は福なる哉」と而して彼は裸體にて十字架の上に曝されたけれども其平靜なる容貌は少も變らなかつた彼は謂た「柔和なる者は福なる哉」と而して彼は石柱に縛り付けられ無理非道に鞭たれ頬を打たれ辱しめられたれども一言の不平をも洩さなかつた彼は謂た「哀憐む者は福なる哉」と而してエダが接吻を以て彼を賣り、ベトロが彼を否み惡徒輩が彼の面に唾したれども彼は惟彼等の爲に罪の赦を祈るばかりであつた彼は言た「父よ彼等を赦したまへ」(路加福音廿三の三十四)と彼は謂た「義のために迫害を蒙る者は福なる哉」と而して彼は其生命其精神其心情一言之を約すれば其の一切萬事を世に與へながら其の最も深く愛せる者に迫害られた數限りもな

き恩恵を人々に施しながら彼等よりは只忘恩無情の返報を受くるばかりであつた。夫でも彼は彼等を救ひ助けんがため喜んで其生命を犠牲に供した。斯の如き崇絶高絶なる行爲は曾て地上に類例の無きことである。是こそ實に道徳美と徳行との極致であると言はねばならぬ。吾人は茲にジャン・ジャック・ルーソーの言を假りて若しもソク・ラテスの生と死とが聖人の夫であるならば、耶蘇基督の生と死とは神の夫であると言ふことが出来る。

寔に耶蘇の生活と死とは神の夫であつた。是は前に述べたる所を熟讀玩味すれば自然に了會し得ることである。何となれば單純の人間では萬徳共に斯の如き圓滿完全の域に達し、而も常に其境界に泰然として

安住することは到底出来得べきことで無いからである。著者は故意に彼の神性を論ぜんだ。是迄は主として彼の人性を研究したのである。然れども彼の性行は尋常一般の人は勿論古今最大の偉人豪傑を絶對的に超絶することは明確にして毫も疑ふことが出来ぬ。而して吾人は是より更に篇章を改めて彼の神性問題を正面より研究し、彼が人間たると同時に眞正の神であることを一目瞭然たらしめ、彼を一般普通の人間と比較することの如何に愚なるかを論證する積である。

### 第貳篇 耶蘇基督の神なるを證す

#### 第壹章 耶蘇基督は自ら神なることを明言

したるが故に神なるを證す

耶蘇基督は屢々自ら稱して人の子と謂た福音書の中には此の「人の子」といふ語が八十回以上用ゐられて居る此の名稱に由りて彼は其人性を證したのであるけれども茲に注意すべきことは彼は決して某々の人の子とは云はないで常に「人の子」すなはち完全なる人と言つたことである。「單に人の子」と云へば人類中の最も完全なる者を指すことは例へば「キリスト」とは希臘語にて聖油を塗られたる者の義にて猶太

國にては帝王司祭の如きすべて聖油を塗られたる者を皆な「キリスト」と云へたれども今日單に「キリスト」と云へば帝王の帝王司祭中の司祭なる救世主耶蘇基督を指し又「バインブル」とは希臘語にて「書物」の義なれども單に「バインブル」とのみ云へば書物中の最も完全なるものすなはち聖書を指し又我國にても單に「太閤」といへば豊臣太閤を指し單に「黃門」といへば水戸中納言を指すが如し寔に彼は古今唯一無二の完全なる理想的人物であつた彼は曰た「人の子は亡ぶる者を求めて救はん爲に來れり」馬竇十八の十二「汝等若し人の子の肉を食ひ且つ其血を飲むに非ざれば汝等の衷に生命あること無けん」約翰六の五四「汝等の中首位とならんと欲する者は汝等の僕となるべし」斯の如く人の子の來れる

も事へらるゝ爲に非ず却て事へん爲め且衆の救贖に其の生命を捐てん爲なる耳(馬竇廿の廿七)。

然れども彼は單に自ら稱して人の子と云へるのみならず尙ほ一層明白に神の子と言つた。あらゆる世代の前に聖父より生れたる神の獨子、天より降り而して再び天に昇り得べき、又己と共に人類を天に昇らしめ得べき、唯一の有力者と言つた。

而して彼の周圍に於る人々も皆彼を呼んで神の子と云つた。けれども謙遜なる彼は少しも之を異まらず、又之を止めもしなかつた。ペトロは跪きて彼に言つた。汝はキリスト、活ける神の子なり(馬竇十六の十三)。マルタは曰く然り、彼は活ける神の子、基督にして、斯世に來させる

者と我は信ず(と)約翰十一の廿七。トマは基督の手足の傷痕に其指を入れたる後言つた。汝は吾主、吾神なり(と)約翰廿の廿八。而して彼が大風を静めた時は使徒等は皆彼を拜して。汝は誠に神の子なり(と言つた)馬竇十四の三十三。

更に之に對する、耶穌基督の態度を見るに自ら眞理と稱し、斯くも謙遜に潔白に至聖至智であつた。彼は少しも之を怪まらず、神若しくは神の實子といふ此尊號を受け、又斯様なる至聖者として、黙つて拜まれて居つたのである。

彼は黙つて此尊稱を受けたばかりでなく、彼を神の子と呼べる者を祝し、且つ賞した。シモン、ペトロが基督の神性を表白した時、耶穌は彼に



言たシモンよ汝は福なり……故に我なんぢに告ぐ汝は磐石なり我この磐の上に吾が教會を建てん地獄の門は之に勝ざるべし馬竇十六の十七。

耶穌基督は猶ほ一步進んで自ら神の子と聲明し而して人の之を信することを求めた彼は生れながら盲なる者に言たには汝は神の子を信するや」と瞽者は其の新に開かれたる目を舉げて彼を眺めながら答へて言た主よ彼は誰なるや我彼を信せんと欲すと耶穌答へて曰く「汝は彼を見たり汝と語る者は是なり」と瞽目は乃ち平伏て彼を拜した若し夫れ耶穌基督が神であらぬならば虚言を以て瞽者を欺き之をして偶像禮拜の大罪を犯せたと言はねばならぬ斯の如きことは如何にし

ても受取れぬ話である何となれば斯の如きは福音書中に現るゝ耶穌の性格と一致せぬことであるから。

而して神の子といふ語の意味は議論を容るべき餘地が無い其の自然の意味に取られねばならぬ事は耶穌基督がニコデモに言つた語に由りて明白である曰く抑も神は世の人を愛するや厥の獨生子をさへに與へたまふ程にして凡て彼を信する者に沈淪びすして却て永生を得せしめんとしたまふなり「約翰三の十六」されば彼は神の獨生子にして神と同性質のものである特別に彼がイエルザレムに宣教せる時に於て彼は最も明白なる言を以て自ら絶對永遠なる神の子なること及び本質上聖父と同一なることを斷言した之を開ける猶太人は始終身

震し、憤激し、耳を塞ぎ、石を取りて彼を撃たんとした。而して耶蘇が「我が善業の孰に因りて汝等は我を石撃んとする乎」と言ひける時、彼等は「我等は善業の爲に汝を石撃に非ず、惟裏漬の爲にする耳、且汝は單に人なるに自ら神と稱するに因りてなり」と言つた（約翰十の廿四以下參看）。  
 彼は自ら神と稱し、神の子と聲明することを止めなければ、終に猶太人に殺されるであらうといふことを善く知つて居つた。不信心なる猶太人は躍起となつて彼を威嚇した、けれども何物も彼をして其言を改めさせることが出来なかつた。彼が此世に来れるは眞理を語るためである。彼の神性を信仰せしめて世を救ふためである。何を以てか、其使命に背戻くことが出来やうや、彼が猶太國の會議場に曳かれて「汝もし基

督ならば、我等に告げよ」と言はれたる時、彼は之に答へて「假令我汝等に告ぐとも、汝等は我を信せざるべし」と言つた。其時司祭等は重ねて彼に問ひけるやう、然らば汝は神の子なるかと、耶蘇曰く「然り、我は是なり」と（路加廿二の六七以下參照）。大司祭は此答を以て満足せず、威容儼然、宗教上のあらゆる法式を具へて、更に最後の決答を求めて曰く「我活ける神に藉りて汝に命す、汝は果して神の子キリストなるかを我等に告げよ」と、耶蘇彼に答へて曰く「然り、我は是なり」と（馬資廿六の六三）。ピラトの前に於ても彼は同様の答をなした。猶太人ピラトに言ひらく「我等の律法に従へば、彼は死せざる可からず、如何となれば、彼おのれを神の子と謂ひ做したれば也」と、約翰十九の七。而して彼が十字架に釘けらるゝや、人

人彼を嘲弄りて曰く汝もし神の子ならば十字架より下りよ然らば我等汝を信せん馬竇廿七の四〇。

去れば此點に就ては些の疑もない耶蘇は自ら神神の子神の眞子と言つた彼は他人より此名稱を受け又は彼に此名稱を與へたる者を祝して之を賞した彼は公然イエルザレムの大道に於て法廷に於て自ら此名稱を用ゐた彼は此名稱を棄てるよりは寧ろ生命を捨てる方を選んだ彼の死んだのは此名稱を用ゐることを止めなかつた爲である此等の事實とは迄述べた總ての事柄とを善く思ひ合すれば彼が自ら神の子と明言したことを信せぬ譯には往かぬ何となれば若しも彼が實際神の子でなくして斯様に言つたものとすれば彼は單に奇々妙々な

る迷を懐けるのみならず狂者であつたと言はねばならぬ而して彼を狂人と認むることは到底不可能事である。

猶ほ此點に關して毫末も疑を容るべからざるもう一つの證據は彼は自ら神と稱ふると同時に神の業を成したことである彼は神の資格を以て人々を救へた曰く古の人々に語つて曰れたるを汝等聞けり……されど我なんぢらに告ぐ……と馬竇五の廿一以下彼は神として命令した曰く汝等往きて萬國民を訓へ凡て我が汝等に命せし事を悉く守ることを彼等に訓へよ視よ我は世の終末まで日々汝等と偕に在るなり馬竇廿八の十九廿彼が悪魔に命じて人の體より出でしむれば即ち出た彼死人に命ずるに起きて歩むことを以てすれば即ち起ちて歩

んだ惟一言を以て彼は癩病者、瞽者、聾者、瘖者を癒した而して此等の奇跡を親く目撃したる者は彼を信じた。彼は罪を赦した而して彼の周圍に居合せたる者は曰く「神ひとりの外誰か能く罪を赦さんや」路加五の廿二。彼は神に歸すべき總ての尊敬、信仰、祈禱、愛を要求した。彼は萬事に超て愛せらるゝことを望んだ。父よりも母よりも夫もしくは妻よりも、子よりも多く愛せらるゝことを求めた。彼は死をさへも恐れざる程の愛を要求した。彼は言つた「我が爲に死する者には、我れ之に與ふるに永遠の生命を以てすべし」と。是等の語は如何に高德の聖人と雖も決して言ふを敢てせぬものである。又若しも是等の語が他人の口より出たならば定めし人々を非常に立腹させたであらうが、耶穌の口より出れば

全く當然と思はれた。何となれば彼は其の神聖なる生活と其の非常なる仕業とを以て是等の語を發し得べき權あることを立派に證據立たからである。されば彼を信せぬ者と雖も彼を以て詐僞、虛榮、功名などの心を懐抱する者とは敢て言はぬのである。苟も惡意ある者でなければ彼を信せねばならぬ。彼は言つた「汝等もし我言を信せずば少くも我業を信せよ。我業は我を證す」約翰十四の十一、十二。

第二章

耶穌基督は愛を求めて之を得たる

が故に神なるを證す

吾人は前章に於て耶穌基督は自ら神と稱し、且つ神に歸すべき總て

の権と捧物とを要求したことを見た。さて是等の捧物の中に彼が特別熱心に要求して此上も無く得たるものがある。是が其の神なることを證する一つの特徴である。彼が人々より要求せる此捧物は即ち愛である。惟之を求めんとする考ばかりでも神たるの自覺が無ければならぬ程に完全で崇高で絶對的で勇壯なる愛である。未だ曾て人が之を求めやうと考へだにすることが出来なかつた程の深大なる愛である。故に斯様な愛を求めて十分に成功したならば、夫は彼が神であると云ふ明證である。

彼曰く「我よりも父や母を愛する者は我に足らず、我よりも子や女を愛する者は我に足らず、己の十字架を任ひて我に従はざる者は我に

足らざる也」(馬竇十の三七)。

又曰く「凡そ吾が名の爲に家あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは子あるひは田畑を舍つる者は百倍を受け、且つ終りなき生命を保有ん」(馬竇十九の廿九)。

又曰く「我若し地より擧げられなば、一切を我に奉かん」(約翰十二の卅二)。

是等の言に據れば、耶穌基督は萬人が彼を愛するやうに求めたことが分る。併し彼は何人をも強ひぬ。惟彼は明かに次の事を人々に告げた。彼が要求する愛は尋常普通の愛や、分割せられたる愛ではなく、あらゆる他の愛に優越する愛である。最も強く、最も勇しき愛である。人をして此

世の快樂より離れしめ場合に因ては彼の爲に此世に於て人の最も珍重するものを悉く投げ棄てさせる愛である時としては鮮血を瀧いで證據立て、生命を犠牲に供するを憚らざる愛である。斯様な愛を人間の心、情より得ることの如何に六ヶ敷くあるかは一寸考へれば分る。否な六ヶ敷きどころではない殆んど不可能とも云ふべき程である。斯様な條件付きの愛を求めざる者は世人に見捨てられて孤獨で終るより外に仕方が無いではあるまいか。假設如何程偉大く勢力あり美德を備へて愛らしき人でも斯様な愛を要求するならば世間の笑草となるであらう。夫も一人や二人の人より之を求めざるならば未だしもの事、世界萬國の而も世の終に至るまでの千代萬代の萬人より之を要求す

るといふことは決して尋常の人間の出来ることでない。釋迦や孔子などは斯様な愛を求めたことがあるか。彼等は之を求めざるを敢てしたことがあるか。否な彼等は決して斯様な愛を求めることが出来なかつた。蓋し彼等は人間に過ぎなかつた爲である。國王は其臣民に己を愛することを要求し得るであらう。けれども彼は萬事に超て己を愛することを彼等に求めぬであらう。又彼は如何程愛すべき者であつても他國の臣民に己を愛することを要求せやうとは思ひも爲まい。然るに耶穌基督は萬事に超て己を愛することを要求した。而して彼は之を單に其時代もしくは其國の人に求めたるのみならず、萬國萬代の人に要求した。凡て彼の弟子たらんと欲する者は萬事に超て彼を愛さねばならぬ。

而して猶ほ一層驚くべきことは彼が其死後に斯の如き愛を獲べき旨を豫言したことである。曰く「我れ地より揚げられなば一切を我に引かん」と何と不思議な事では無いか。愛の熱火を熾ならしむる大燃料は現に其當人を目撃することではないか。人は速に死たる者を忘れるが常である。喪の涙が乾くか乾かぬ中に死たる者を忘れて更に別の人を愛するやうになるものである。然るに其死後世の終末に至るまで人々が己を愛すべき旨を本気で豫言するといふことは如何にしても神でなければ出来ぬことである。

偕此豫言は果して實現せられたるか。耶蘇基督は其死後世界萬國に於て愛せられたか。彼は萬事に超て愛せられたか。彼は其死後の代々に

於て愛せられたか。而して今日も猶ほ彼は其要求せる非常なる愛を獲つゝあるか。然り彼は如何にも其豫言の通り愛せられてゐる。誰でも此事實を否認することが出来ぬ。試に聖會の歴史を取り出来るならば其初め使徒等が當時知られたる世界各國に於て教化せる基督信者の數を計算へよ。羅馬帝國に屬せる諸國に於て基督の爲に血を流せる數百萬の殉教者を數へよ。當時パレスチナ埃及及びアラビアの野や砂漠に住へる隱者共。修士。獨修士及び其他各種の苦行者の數をかぞへよ。基督の初代より存在し中古時代に至りて隆盛を極め今も猶ほ盛ゆる所の世界各國に散在する男女修道院の數を數へよ。出来るならば其財産本國家族及び其の所有せる一切の物を棄て、其身を是等の修道院に

投じたる者の數を計へよ出來るならば又俗界に留り俗人の生活を送りながら眞正の愛を以て耶穌基督を崇拜する信者の數を算へよ然らば耶穌基督は其の豫言せる如く萬國萬代の萬人に萬事に超えて愛せられたることを是認するに躊躇せぬであらう寔に今日に至るまで萬事に超て耶穌基督を愛せる老弱男女の數は數ふべからざる程である。而して彼等の愛は犠牲、献身の最高度にまで達した例へば聖人傳中に見るが如く或場合に於ては母親が自分で其の最愛の子女を勵まして耶穌基督を棄つるよりは寧ろ其生命を棄てさせたるが如き即ち是である。

斯様なる愛を求めて之を得たる者は何者ぞや、パレスチナの僻陬に

於て一日自ら「我は愛せられんことを欲す、我は萬事に超て愛せられんことを欲す」と言ひ而して其の言へるが如く欲せるが儘に地上一切の愛を超越せる所の愛を贏得たる者は如何なる者ぞや、誰か彼を以て人間に過ぎずと言ふことが出來やうか、是れナポレオンがセント、ヘレナに捕虜の生涯を送れる際に深く感得せる耶穌基督の神性を證する大論證である彼曰く「耶穌基督は人々の愛を求めた、彼は最も得難きものを求めた……彼は之を求めて成功した故に余は彼を以て神と爲す」と。之より前にパスカルも亦同様のことを言つた曰く「耶穌基督は愛を求めて愛を得た故に彼は神ならざるべからず」と。



第三章

耶蘇基督は自ら憎まるべきを豫言

し、果して其言の如く憎まれたるが

故に神なるを證す

前章に述べたる證據は如何にも明白なれども猶ほ一層之を明瞭にするため更に耶蘇基督の第二の豫言を之に加へねばならぬ此預言も前同様に奇妙なるものであるにも拘らず奇妙にも實現せられた耶蘇基督は單に愛を求めて愛を得たるのみならず彼は其の憎み嫌はるべきを豫言したが果して彼は昔より今に至るまで憎み嫌はれて居る而して不思議なことには是が彼の神性の明なる證據となるのである。

奇妙なことには耶蘇基督は始終斯様に善良で柔和で完全なる人であつて而して毎日數々の恩恵を人々に施されたるにも拘らず其周囲に敵が絶えなかつた夫よりも猶ほ一層不可思議で解らぬことは世の人々を救はんが爲に十字架の上にて非常なる苦痛を受けて其生命を犠牲に供して死去せるにも拘らず常に大多數の人より憎み嫌はれたることである此現象は耶蘇基督が其誕生後程なくゼルザレムの聖殿にて神に献げられたる時老翁シメオンにより既に預言せられた其時老翁は嬰兒を抱き取りて言ひけるや「斯の兒はイスラエルにて衆くの者の仆れん爲め又衆くの者の興らん爲に立てらる且辯駁を來たすべし記號となるべし」路加二の三十四。

耶蘇の公生涯中其の憎み嫌はれたる理由は約翰著福音書第八章に記されてある。耶蘇ユデア人に告げて曰く「吾が言なんぢらの裏に保つこと無きが故に汝等は我を殺さんと求む……然るに今汝等は神より聞たる真理を汝等に告ぐる人なる我を殺さんと求む是れアブラハムの業にわらず……汝等は惡魔なる父より出でたり而して汝等が父の願欲を汝等は行はんと欲す彼は初より殺人者なり」と。

耶蘇がラザロを復活せしめたる時司祭長等と、ファリゼオ徒等議會を開きて曰く「斯人許多の異徴を成せば我等如何に爲すべき乎若し彼を此まゝに恕しおかば皆彼を信せん云々」約翰十一の四七、四八。

「但し司祭長等はラザロをも亦殺さんと謀れり是は彼の爲に衆多の

ユデア人往きて耶蘇を信じたるに因りてなり」約翰十二の十、十一。

上に掲げたる福音書の明文に據れば祭司長、ファリゼオ徒、律法の博士等が耶蘇基督を惡み嫌ひたる理由は彼が彼等に真理を告げ、彼等の教訓を改革し、彼等の非行を責めたるが爲、又特別彼等は人々が耶蘇の許に走り、遠らず彼を信じて、彼等を見棄るに至らんとするを見て、嫉妬を起したるが爲なること明白である。人もし人心一たび傲慢、嫉妬の如き邪情に支配せらるゝ時は如何に凶惡に如何に冷酷になり得るか。知らば耶蘇が是等の一人々に憎まれたること、又彼等が自分等の邪魔物を取除るため、耶蘇を殺したることを幾分か了り得るであらう。けれども耶蘇が死んで丁へば最早彼を憎み嫌ふべき理由が無さうに思は

れる。特別後世の人々に至りては彼を嫌ひ惡むべき理由が無さうに思はれるが決して左様でない。耶蘇基督は使徒等に左の如く言つた曰く「世もし汝等を憎まば其が己に汝等よりも先に我を憎みたりしを知れ汝等若し世の所屬なりしならば世は己の者を愛したらん然れども汝等は世の所屬にあらず却て我なんぢらを世より選ひ離したるなれば世なんぢらを憎むなり我が嘗て汝等に告げたる言を記憶せよ云く「僕は其の主より大ならず彼等若し我を迫害たらば亦なんぢらをも迫害ん、……然し乍ら吾が名の爲に彼等は將に此等の事を皆なんぢらに向ひて爲んとす是は我を遣はし給へる者を彼等知らざるに坐する爾云々」(約翰十五の十八以下)。

又曰く「彼等將に汝等を會中より逐んとす否な凡そ汝等を殺す者みづから神に盡す所ありと思ふ時來らん彼等は父をも我をも識らざるが故に此等の事を汝等に爲さんとす」(同く十六の二三)。

耶蘇基督は使徒等弟子等の憎み嫌ふべきを明かに預言した而して彼等の憎まれるのは彼等の爲でも彼等の仕業の爲でもなく惟世人が基督と其教とを憎む爲であつて此憎惡は世の終末まで續くべきを預言した世人が斯の如く基督を憎む所以は何であるか何故此憎惡は世の終末まで續くか宗教の開祖中基督の如く酷しく且つ永く世人に憎み嫌はるゝ者が他に有るかマホメットは憎まれなかつたゾロアストルは憎まれなかつた釋迦も孔子も箇程までには憎まれなかつた只ひと

り耶蘇基督ばかりは際限なく憎まれた是は如何なる理由であらうか。其理由は耶蘇基督は今も昔に於けるが如く生存する爲である其教訓は何時も同一である爲である彼が生前憎まれたる理由が何時までも存続く爲である彼が常に傲慢不潔白不正義虚偽我慾を責める爲である一言以て之を要すれば人は實際眞理正義聖徳の神を憎む爲である我を憎む者は又我父を憎む(約翰十五の廿三)と耶蘇基督は言つた寔に斯様な憎悪を受け得る者は唯眞神ばかりである。

第四章 耶蘇基督は世を刷新したるが故に

神なるを證す

耶蘇基督が此世に生れ出でたる時に方り羅馬帝國は其隆盛の頂點に達し世界の大部分は其版圖に歸し文學美術學問は相提携して珍しきものを作り出した斯の如く物質的文明の隆昌を極むるに反し世界の道徳宗教は彌よ退歩して腐敗墮落の頂上に達し實に目も鼻も當てられぬ有様であつた木や石や金の偶像は有りと有らゆる形體を執り物として禮拜せざるは無かつた甚しきに至りては最も醜劣なる體慾獸慾までも神として拜んで居つた家庭の基礎は破壊せられ人々結婚せずして肉慾を満足することに耽りたれば羅馬皇帝は人類の絶滅を防止するため餘儀なく法律を制定するに至つた奴隸制度は普通法律の一部を構成しあらゆる身分の婦人は奴隸中の第一に位して居つた。

婦人は甚しく輕蔑せられ物品と同一に見做されてあつた離縁は公認せられ賣姪は公許せられ捨子と子殺とは兩親の勝手に任せられ公けの遊戯場や家庭に於て人の血を流すことは許され罪人は無理非道に慘殺せられた是等の事を見ても當時の社會の風俗が如何に甚しく紊亂し如何に深く腐敗して到底人力を以ては救治すべからざるものであつたかといふことが分る。

然るに突然此の腐敗せる社會の真中に一團の人が現出た彼等は別の法則に従ひ此の腐敗の潮流に反對した彼等は獨十字架に釘付られたる神をのみ拜みて其他一切の神佛を排斥し木や石を以て作られたる異教の見苦しき神佛を禮拜するを以て眞神に對する不敬不忠の所

行と爲した彼等は漸次其奴隸に自由を與へ若くは少くとも親切に之を待遇した彼等は最早離縁を是認せず婚姻を以て神聖なるものとなし夫婦を以て一結不離のものとなした其子女の生命を尊重し其教育に注意し善良なる臣民を養成するを務めた婦人は男子の伴侶として尊敬せられ家庭に於て名譽ある位地を占め其兒童に敬愛せられた彼等は賣淫と殺人とを大罪として嚴禁した毎日曜日には相集會りて眞神の禮拜式に與り生命も貞潔も名譽も尊重せられざる野蠻なる遊戯や異教の祝祭などには出なくなつた彼等の數は迅速に増大し忽ちにして一般人民の注意を引いた而して彼等基督教徒は縦ひ口に出して言はざるも少くとも其實踐躬行を以て周圍の人々の悖徳蠻行を黙々

の裏に非難したるが故に世人は彼等を讒謗して帝國の仇敵あらゆる不幸あらゆる天災地殍の原因なりと爲した。三百年の間彼等は迫害られ、貴賤老幼男女の差別なく容赦なく惨刑酷罰に處せられた。而して三百年の窘逐と數千人の殉教者を生じたる後、コンスタンチン大帝が羅馬帝國の唯一の皇帝となり自ら基督教を信奉せる頃には基督教徒の數は著しく増加し、到る處に之を見得るやうになつた。是に於てか、世の風習は少しづつ、温和になり、基督の教訓は風俗習慣制度法律に浸み込み、少しづつ、歐羅巴および其他の基督教諸國の面目を變化したのである。

此變化刷新が一朝一夕に出来なかつたことは明白である、如何なる

國に於ても概して其人民が基督教に改宗したのは少しづつ、漸を以て成たのである。而して王侯や立法者が基督教を信奉しなかつた中は身分の賤き只の信者は餘り顯著なる影響を及ぼすことが出来なかつた。勿論此場合に於ても彼等の徳行と其の善き手本とは知らず識らずの間、大なる感化を周邊の人々に及ぼしたに相違ない。基督教徒の模範的生活、其平穩なる良心世の人々が心配し熱望する地上一切の事務を輕ずること、信教の爲に喜び勇んで死に就くこと、宛がら家に歸るが如くなること等は從來異教の感化の下に安佚と五官の快樂と驕奢とのみ養成せられたる異教徒の上に深大なる感動を與へた。何人も基督教の中には人の精神を改造して一旦墮落せる人類を再び人間らしき

新人となし得る力の有ることを拒むことが出来なかつた。又基督教徒が自ら最上の珍寶として信仰を受け、且つ其幸福を世人にも分たんがため傳道布教に熱心なりしことは異教徒の冷淡無頓着と著るしき對照を呈露したに違ない。

基督教が其健全なる感化を以て特に世界の文明に貢献したのは中古時代である。此時代の始に北方の野蠻人は歐羅巴の西部に侵入し、土崩瓦解せる羅馬帝國の廢墟を占領した。フラン人、ハン人、ヘチール人、ゴス人、グジゴス人、ロンバル人などは代る代るゴール、今の佛蘭西、西班牙及び伊太利に侵入し、其人家を焚き、住民を殺した。是等諸國の人民は彼等を保護すべき政府の無能無力なるため勝ち誇れる野蠻人の

手に渡され如何とも爲ることが出来なかつた。是に於てか彼等は相一致して當時彼等の爲に唯一の城壁たり避難所たりし教皇と司教等との保護を仰ぎ求めた。學問藝術文明の何物たるを毫も解せざりし是等の野蠻人は狩獵と戦争との外には何等の職業を知らず、腕力と暴行との他には何等の法律をも道德をも認めず、征服の榮譽の外には他の榮譽を解せなかつた。彼等は其野蠻なる状態に満足して毫も之を以て不便とも無秩序とも思はなかつたのみならず、却て文明開化の生活に對し無上の輕蔑を表したのである。基督教は是等の蠻民を感化して其信徒となし、少しづゝ其殘忍猛惡なる風習を柔げたけれども、此の美しき効果は徐々にしか現れなかつた。大多數の者は永き星霜の間依然とし

て舊來の蠻風惡習を墨守して居つたのである。聖會が是等の蠻民を教化するため如何に多くの障碍と困難とに打克ねばならなかつたかは容易く想像することが出来る。彼等を信者とするには先づ彼等を人間となさねばならなかつた。耶蘇基督の聖會は中世紀中すなはち殆ど千年計の間屈せず撓まず是等蠻民の教化に盡瘁して其粗暴なる本性を和げ征服者と被征服者とを混然融和して歐羅巴近代の文明社會を準備したのである。斯の如き効果を生じ得るものは眞神の宗教と眞神の全能力を有する聖會でなければ出来ぬ事である。

社會はマホメットの爲に改造せられ風俗は彼の教訓に因りて刷新せられたるか否な「マホメット」教は却て基督教が既に開き始めたる文明の

進歩を阻害し基督教を棄て「マホメット」教に歸依せる人民を再び以前の野蠻と悖徳汚行とに沈淪せしめればかりである。佛教は之を信奉する人民を改造したか。成程佛教の道徳には高尚なる教訓もある。是等の教訓を守りて立派な生涯を送れる名僧もある。又佛教はストア哲學が古代の希臘羅馬に於て成せるが如く俗人中の優秀者の上に其感化力を及ぼしたに相違ないけれども佛教が之を信奉する一般人民の道徳を根本的に革新したる例は一つも見ることが出来ぬ。基督教國に於ては基督教の勢力が減少すれば其れに相應して社會の道徳が腐敗することを明かに認め得れども佛教國に於ては其國民の道徳の標準が佛教の盛衰に従つて高下するとは言ふことが出来ぬ。佛教の最も盛なる



西藏には一妻多夫や其他の野蛮なる風習が流行して居るではないか。又日本に於ても有名なる神社佛閣の附近には醜業が盛に行はれて居るではないか。而して是等醜業者は參詣人を以て重なる顧客と爲すのを見れば佛教の道徳に及ぼす感化の如何に無能無力であるかを察知することが出来る。

基督教が之を信奉する國民の道徳風俗を革新したることは普く世人に知悉せらるゝ歴史上の事實であるから茲にくどくしく述ぶるに及ばない。扱此歴史上の大現象を生じたる原因は之に相應する大事件でなければならぬ。此精神界の一大變化を惹起したる者は偉大なる威力を有する者でなければならぬ。然らば其大事件は何時起りたるか。

此の限りなき進歩の第一歩は何處にありや。誰が此新時代を開始したるか。言ふまでもなく其は耶穌基督である。此進歩の始まりはカルワリヨ山上に於る基督の死である。而して此の救世の力の生じたる驚くべき効果を見れば何人も此の偉大なる力の主人公たる基督の神なるを疑ふことが出来ぬ。

### 第五章

### 耶穌基督の建てたる教會は永久不變なるを以て其の神たるを證す

耶穌基督の建てたる教會の永久不變なることも亦其の神性を證する最も明白にして最も有力なる證據の一つである。之に就て問ふべき

ことは次の二ヶ條である第一耶蘇基督は其教訓を永く世に傳へ其救  
 靈事業を續くる爲め教會を建つるの意志を有したるか又實際彼は之  
 が爲に教會を建てたるか第二其教會は迫害と仇敵とに打克て今も猶  
 ほ耶蘇基督が建てたる儘に存在するか若し此の二個の疑問に「然りと  
 答へ得るならば耶蘇基督は神に相違ないのである。

先づ第一に耶蘇基督が教會を建つる意志を有せることは福音書に  
 據りて明確であるシモンペトロが「汝はキリスト活る神の子なり」と言  
 ひて基督の神性に對する信仰を表白はせる時耶蘇之に答へて彼に言  
 ひけるは「ヨナの子シモンよ汝は福なり、そは之を汝に啓示せしは、血肉  
 に非ず天に在す吾が父なれば也、また我なんちに告ぐ汝は磐石なり、我

この磐の上に吾が教會を建てん、地獄の門は之に勝ざるべし、我なんぢ  
 に天國の鑰を與へん、凡そ汝が地にて繫ぐ所は天にても繫がれん、また  
 凡そ汝が地にて釋く所は天にても釋れん、馬竇十六の十六以下、此明文  
 に據れば第一耶蘇基督が教會を建つるの意志を有せること、第二其教  
 會をペトロの上に建つるの意志を有せること、換言すればペトロを教  
 會の首領となすの意志を有せると、第三其教會を如何なる強敵にても  
 之を滅す能はざるほど堅牢鞏固に建てる意志を有せるとは明々白々と  
 して少しも疑ふことが出来ぬ、既に是れだけにも彼が神であつたこ  
 とが分る何となれば斯様なる意志は神でなければ有することが出来  
 ぬ、如何なる攻撃を受けても、すなはち其攻撃が暴力より來るも、權謀術

數より來るも惡魔より來るも世間より來るも決して滅びざるほど堅  
牢なる教會を創立せやうといふ意志は神ならでは有することが出來  
ぬ何種の會に拘らず斯様に鞏固なる會を創立せやうといふ志望を抱  
ける者は基督の外に未だ曾て無い今後も亦有るまい。

次に耶蘇基督が如上の意志を實現する積りであつたことも次に掲  
ぐる聖書の明文に據りて明白である基督ペトロに謂て曰くシモンよ  
シモンよ視よサタン汝等使徒等を麥のごとく篩はんとて汝等を求め  
たり然れども汝(ペトロ)が信仰の匱きざるやう我なんぢの爲に購れり  
汝一たび自ら改むるや汝の兄弟等を堅固うせよ(路加廿二の卅一以下)  
又其復活後三次目に其弟子等に現身れける時彼ペトロに問ひけらく

「ヨハネの子シモン汝は此等よりも増して我を愛するや」彼耶蘇に白さ  
く然り主よ我が汝を愛するを汝は知りたまふ「耶蘇彼れに言ひけらく  
吾が羔羊を牧せよ」耶蘇再び彼れに言ひけらく「ヨハネの子シモン汝は  
我を愛するや」彼耶蘇に白しけるは然り主よ我が汝を愛するを汝は知  
りたまふ「耶蘇彼れに言ひけらく吾が羔羊を牧せよ」耶蘇三次かれに言  
ひけらく「ヨハネの子シモン汝は我れを愛するや」ペトロは三次目に又  
も汝は我を愛するやと己に言ひたまひしに因りて憂へたりしが遂に  
之に白さく主よ汝は知りたまはざる所なし我が汝を愛するを知りた  
まふ「耶蘇彼れに言ひけらく吾が羊を牧せよ」(約翰廿一の十五以下)さ  
て是等の言を以て無意義の語と爲すは耶蘇基督を侮辱することであ

る。又もし是等の言に意味ありとすれば其は唯一つの事を意味するに過ぎぬ。すなはち耶蘇基督はペトロを其の羊と羔換言すれば普通の信者と牧師との首長となし指導者と爲されたといふことを意味せねばならぬ。

第二に耶蘇基督の意志は果して實現せられたるか。すなはち耶蘇基督の教會は其創立以來今日に至るまで不変不動に繼續しつゝあるか。之を検ふるには歴史に就て教會創立當時の憲法を取り之を現今行はるゝ所の憲法に一々比較對照すれば可い。借て歴史に據れば此教會は最初より其首領としてペトロ之を統治し其の死後は其後繼者なる羅馬の司教之を支配した信仰の基礎たるものは今日の如く使徒信經で

あつた秘蹟も今日と同じく洗禮堅振悔悛聖體終油品級婚姻の七つであつた。其の道德の基礎たるものは矢張天主の十誡であつた。即ち憲法の四大要素たる首領信仰秘蹟及び道德は今も昔と全然同一にして毫髮の變動を見ぬ。此四大要素中の唯一つでも缺く所の教會は耶蘇基督の建てたる教會と稱することが出来ぬ。

基督教會創立以來二千年の永き歲月の間其仇敵より有りとあらゆる攻撃を受けたるにも拘らず其教會員の墮落し離叛したるにも拘らず又其首領の弱點を有する人たりしにも拘らず憲法上些の變化も無く其教會を保護したるは神ならざれば出来ぬことである。教會の首領も矢張他の人々の如く弱點も缺點も有る人間であつたのである。何と

なれば耶蘇基督がペトロと其相續者とに約束したる不可謬性なるものは彼等が全教會の首長の資格を以て全教會の信奉すべき信仰道德の問題を決定する時に限らるゝものにて決して人間としての彼等の一言一行までも常に誤謬なく完全無缺であるといふ意味ではないからである。

基督の教會が如何に多くの攻撃と困難とに遭遇したかを今少しく委しく説明さう。先づ教會創立の當初より三百年の間といふものは引續いて少しの間断もなく異教徒より最も猛烈き迫害を受けた。コンスタンチン大帝に至るまでの羅馬皇帝は残らず基督教會を滅ぼすことを以て彼等の務の如く心得て居つた。されば當時に於て基督教會の首領

となることは其の爲に致命することを承諾すると同じことであつた。十回の大迫害が連續いて行はれ、數千の殉教者は鮮血を瀧いで、其信仰を證した。帝國の到處に基督教徒の責道具と處刑の機械とを見るに至つた。基督教徒は根絶しに爲られるであらうと思はれた。然るに不思議なる哉、人間の眼を以て見れば基督教會は茲に全く滅亡して了ふであらうと思はれたるにも拘はらず、テルチリアンの言ひける如く殉教者の血は信者の種子となり、基督教徒の數は減少するどころか却て益々増大し、終に三百年の慘憺たる迫害を経て基督教會は何時になく盛大となつた。斯の如きは神の御力に因ると言はねばならぬ。而して其後も教會が新なる邦國に擴るに際し、何時も同様に流血の迫害に出會つ

たのである。

迫害の外に教會の遭遇せる試嘗は異端である教會の教ふる信條は殆んど残らず代る代る異端に否認せられたと言ふことが出来る。此試嘗は教會の爲に迫害よりも危険であつた。今異端の重なるものを擧ぐれば、アリウスは耶蘇基督の神性を否認した。彼は紀元三百二十五年ニセアに開かれたる教議會に於て當時の教皇及び全世界の司教等に依りて罰せられた。マセドニウスは聖靈の神性を否認し、紀元三百八十一年コンスタンチノブルの教議會にて罰せられた。テトリウスは聖母マリアの神母たることを否認して紀元四百三十年エペソの教議會にて罰せられた。

第九世紀にフシウスは羅馬の司教の最上主權を否認して東部教會を羅馬より分離した。此離教は彼の死と共に一時消滅したけれども、其後凡そ二百年を経てミカエルセルラリウスといふ者出で、之を再興し今日に至るまで繼續して居る。凡て是等の異端及び離教は聖ペトロの後繼者なる教皇と忠實なる司教等とによりて罰せられ禁せられ、其主唱者は原始の憲法と教義とに忠實なる真正の基督教會より破門せられた。

第十六世紀に於て一の新なる異端が起つた。ルuterと名くる修道者が教會に反抗し、改革を口實として信條の一部分を否認し、殆ど總ての秘蹟を排斥した。獨逸全國は之が爲に忽ち大擾亂の中に陥り、幾多の

新教派は起り戦争は四方八方に破裂したルーテルは其の唱道せる新説に因り誘起せられたる是等の叛亂を制止することが出来なかつた。遂に彼は千三百廿年に於て教皇ニコラスに破門せられ而して獨逸國の大半は其後程なく新教になつた。其後幾くもなくして英國の王ヘンリー第八世は其の我儘なる慾情を満足せしめんが爲め最初の婚姻の取消を願つたけれども教皇は之を聞入れなかつた爲め強制的に其王國を羅馬教會より分離せしめて新教を信奉せしめた。是や其やの爲に數百萬の公教徒は異端の新教を信奉し千五百年來先祖代々信仰し來りたる耶蘇基督の教會外に投棄てられた。

若しも教會が少く其法規を緩め和げ其憲法に多少の改正を施した

ならば斯様に澤山の信徒を失ふことを免れたであらう。實に教會の創立者が人間であつたなら此場合に多少の譲歩をしたに相違ないけれども耶蘇基督はペトロに謂た曰く「我は汝の信仰の既さざるやう汝の爲に禱れり」と。ペトロは其後繼者の中に何時も生て居る故に教會は信仰道德の問題に關しては改革の必要が無いけれども其頃教會は其風俗規律の上に於て改革を要した。是は何人も承認する所である。併し之を改革するにはルーテルの如く教會より分離するには及ばぬ。そこで斯様なる場合に何時も爲る如く教會の頭領は信仰問題の裁判官たる司教を召集めた。公教議會はトラントに開かれ千五百四十五年より千五百六十三年まで繼續し所謂宗教改革者等の謬説を悉皆所罰し又聖

職者及び修道者の間に存せる弊害を矯正して教會の風紀を大に振肅  
 したされば教會は依然として其教義に確立し其仇敵は狼狽爲すべき  
 所を知らざるに至つた吾人は茲に教會が歐羅巴諸國の帝王の名譽心  
 及びフラーマーンソンの如く教會の破滅を期する秘密結社の陰謀策に  
 對して如何に多くの悪戦をなし苦闘を續けつゝあるかを語る邊がな  
 い然れども其教會を今日まで金匱無缺に保護したる者は今後も何時  
 までも之を守るであらう教會が今日に至るまでの道中にて遭遇せる  
 上述の障礙困難に打克たるは全く神の佑助に之を歸せねばならぬ基  
 督教會が斯の通り不變不動に永續することは其創立者耶穌基督の神  
 性を最も善く證明するものである。

試に全世界を驅廻りて創立以來少しも變動なく其憲法と其教義と  
 を保持したる教會が他に有るか如何だか搜索て見よ其首長の系統連  
 綿として二千年に亘るものあらば請ふ其名を擧げよ若し斯の如きも  
 のが有らば余は其創立者の神なるを信するであらう何故世には彼此  
 相異なる宗教や宗派や教會が斯様に澤山に存在するか其は創立者  
 が人間であるから原始の状態の儘に不變不動に之を保持する力が無  
 い爲である世には往々釋迦を耶穌基督に比較する者があるけれども  
 釋迦は如何なる教會を建てたか成程彼は佛教の開祖と仰れて居るけ  
 れども彼は其教義を不變不動に保持する爲に教會を建てなかつた人  
 或は佛僧の團體を基督の教會と同一視するかも知れぬ何となれば僧



すなはち梵語の僧伽は和合衆の義で釋迦佛陀の弟子等より成れる心  
 靈上の團體を意味するからであるけれども此團體には教祖の教義を  
 純潔無謬に傳へる爲に定められたる憲法が無いのみならず其團體は  
 統一なき無数の宗派に分離した今日釋迦の建てた佛教が何故に在る  
 か日本に在るか朝鮮に在るか支那に在るか將た印度に在るか何處に  
 佛教の首長が居るか釋迦の跡を繼いで全佛教團體の統一を維持する者  
 は誰か何人も是等の質問に答へ得ぬであらう釋迦は唯一種の人間的  
 宗教すなはち人間の良心を検束する權力を有せざる宗教を開創した  
 るに止る蓋し人の良心を検束し得る者は獨り神ばかりである故に人  
 は宗教を開創しても不動不變の教會を建てることは出来ぬ人間の定

めたる事は人間が之を變改することが出来る故に甲の定めたる事は乙  
 之を改正し而して丙若し乙の改正を以て満足せざれば更に之を改變  
 することが出来る斯して無数の宗派は生ずるのである是等の宗派は  
 孰も齊しく他人の良心を検束する權力が無い他人に何等の義務をも  
 課することが出来ぬ縱令其信徒に幸福を與ふることを約束しても實  
 際に之を與ふることが出来ぬ何となれば幸福は善徳の報賞であるか  
 ら間違なく之を與ひ得る者は惟人間の心と凡ての其行爲とを知悉し  
 給ふ所の無上の主なる神あるのみである。  
 獨り主なる神のみ己を禮拜するの義務と其の定めたる掟を守りて  
 善を爲すの義務とを人間に課することが出来る獨り神のみが真正の

宗教を開創し得る人間には此權が無い。獨り神のみ人間の心理を洞觀し其の一切の行爲を識別して公平嚴密なる賞罰を施すことが出来る。獨り神のみが其教訓と其法規とを保存する爲に不動不變不滅の教會を建てること出来る。獨り神ばかりが其教を守る者に人の心が絶えず憧憬し渴望しつゝある所の永遠無窮の眞福を與へ得るのである。然して世界には數多の宗教があるけれども人もし潛心誠意を以て神の立て給へる宗教を求むるならば其は唯一つの天主教あるばかりであることを認むるであらう。何となれば耶穌基督の立てたる不動不變不滅なる眞正の宗教は天主教の外に之を發見することが出来ぬ。而して耶穌基督は吾人の證示せる如く其言行と其創立せる事業と

を以て自ら神なることを證明したからである。

# 基督の超人格

明治四十一年六月一日印刷  
明治四十一年六月五日發行

著者 ルマレシヤル

發行者 堀川 柳助  
東京市神田區神田錦町一丁目拾番地

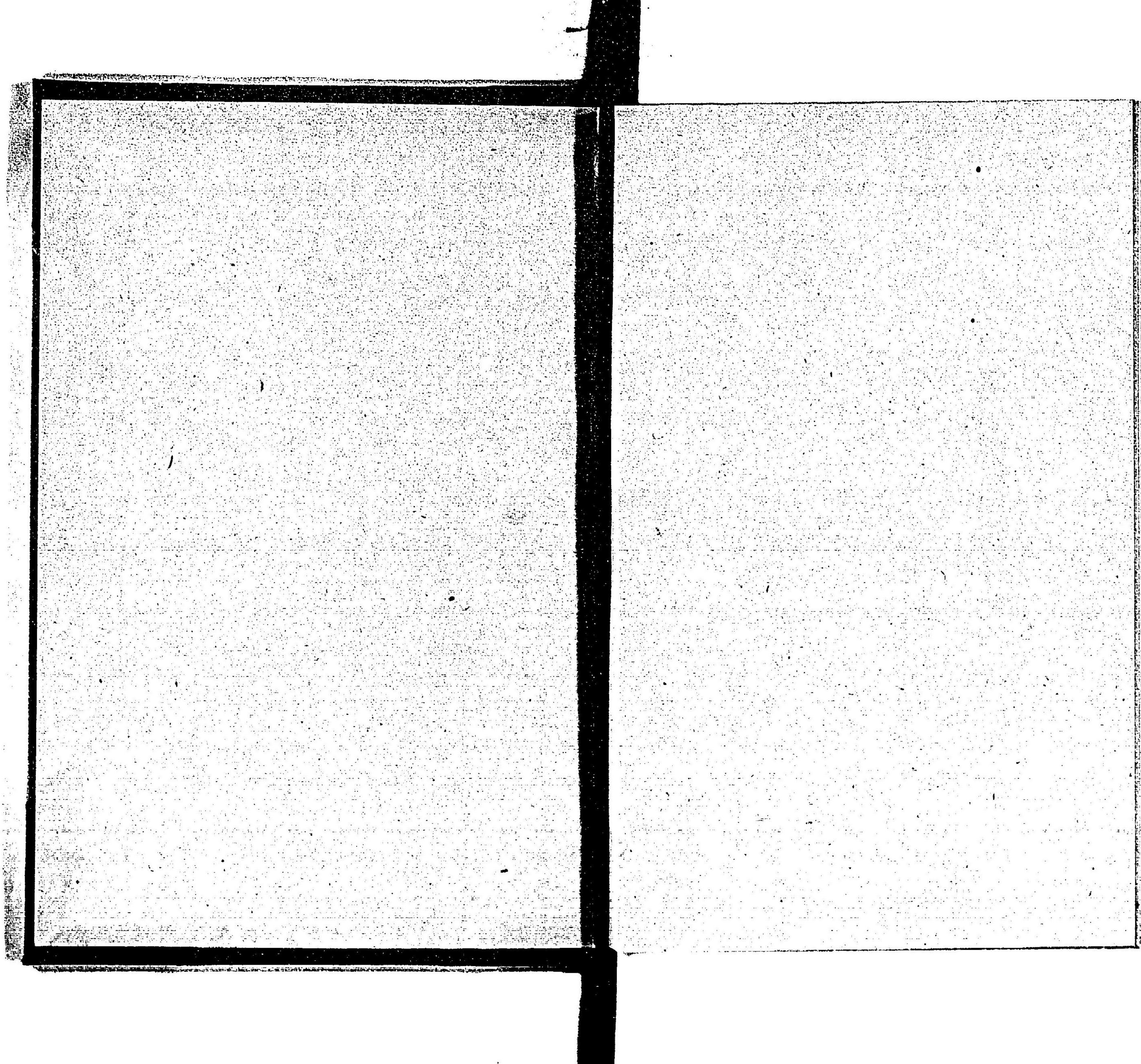
印刷者 守岡 功  
東京市京橋區築地三丁目二十一番地

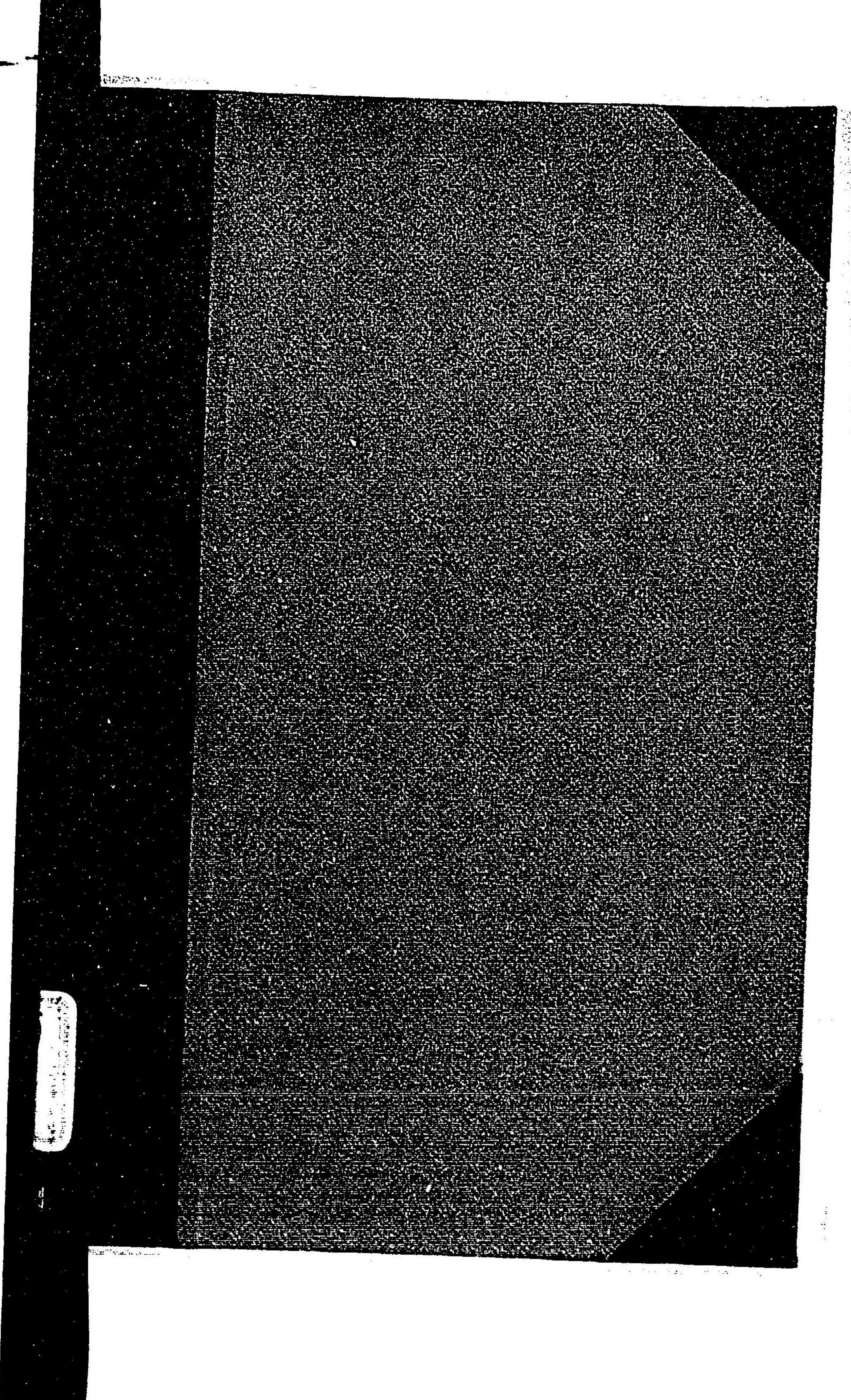
印刷所 株式會社 國光社  
東京市神田區神田錦町一丁目拾番地

發行所

三才社







325  
48

020580-000-6

325-48

基督之超人格

ルマレシャル/著

M41

ABI-0395



36.12.19